

---

# 蒼神OFF！！駄弁ったり出かけたりします

肥後魚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼神OFF！！ 駄弁ったり出かけたりします

### 【Nコード】

N4585M

### 【作者名】

肥後魚

### 【あらすじ】

この物語は、『蒼神の軌跡』のキャラたちがなんやかんやでいるんなことをします。（駄弁るときもあれば、どっかに出かけたりします。）

普通にキャラ崩壊があります（魔王化、ヤンデレ化、などなど・・・）。

基本的にコメディですので、軽い気持ちでお読みください。

でかい魚との馴れ初めと、先の物語のちょっとした抜粋（前書き）

肥後魚

「さてさて、いよいよ『蒼神OFF!!』 駄弁つたり出かけたりします』の最初の話です。」

次真

「基本的に俺達はボケてます。『魔法少女リリカルなのは系列 蒼神の軌跡』とかけ離れているようなキャラもいるかもしれませんが、そこところはご了承を。」

肥後魚

「さて、でははじめようかな。四葉、よろしく!」

四葉

「りようかい。『蒼神OFF!!』 駄弁つたり出かけたりします』はじまるわよ」

でかい魚との馴れ初めと、先の物語のちょっとした抜粋

これは、次真とある魚の馴れ初めである・・・。

二年前・次真14歳・とある釣り場

ふと気づくと、辺りはもう暗くなっていた。

こんな状況下で、次真は未だに釣りを続けていた。

「ふう、まあこれだけ釣れれば文句無いんだが、大物が掛かってないからな・・・。」

二つのクーラーボックスは、既に魚で一杯だった。まあほとんどがサバであつたが・・・。

「まさかこんなトコでサバの大群にぶち当たるとは・・・。まだまだこのポイントも謎が多いな・・・。」

ここに来るのは5回目くらいだ。それでもポイントの魚種というのはなかなか把握できないらしい。

と、

(バシャッ!!)

「おっ!! 食いついたか!!」

大物仕掛けの竿に、待望のアタリである。次真は急いで他の仕掛けを陸に上げた。

(ジー・・・ジイイ!!!!)

リールのドラグはきつめにしていたが、糸がどんどん出て行った。

「!? こりゃ相当な奴が掛かったな。」

次真はやり取りをしながら、笑みを浮かべた。

「よしっ！…… たっぷり相手してやろっじゃねえかあああああ！  
！……！！」

彼の釣り人魂に、火が着いた……。。

一時間後：帰りの電車内

「あの・・・、お客様・・・。あのお荷物は？」

「えっ？ 魚だけど？ もしかして、臭いって苦情がきてるんですか？」

車掌の問いかけに、次真は少し申し訳なさそうに答える・・・。

「あ、いえ。そのような苦情は来ておりません・・・。ただ・・・、」

「ただ？」



「さすがにサメを生きたまま荷物室に乗せてもらいますと、ちょっとこちらが恐ろしいというか・・・、なんか基本的にNGというか・・・。」

そう、

先程最後に釣れた大物とは、

サメだった・・・。

一時間後・自宅前

「さて、こいつをどうするかだが・・・。」

次真は、結局生かしたまま持って帰ってきたサメをどうするかで悩んでいた。

（ガタガタガタ・・・）

心なしか、サメはなんだか震えているようだった・・・。

「よし、家の前の生簀にでも放すか。まあ他に魚は入ってないしな。」

東西100m、南北50mはあろうかという巨大な生簀が、次真の  
うちには在る。

（ホッ・・・。）

サメはなんだか安心しているようだった。

二年後・生簀

「米助、飯だぞ。」

次真はバケツ一杯の魚を生簀に放り込んでやる。

（バシャバシャツツ）

米助と呼ばれ魚に食いついたのは、二年前に釣り上げて生簀に放していたサメ（ホオジロザメだった・・・）である。

当時は1・5mほどだった体長も、今では5m近くにまで成長している。

「もう2年経つのか・・・。お前を釣り上げた時はびっくりしたなあ。なにしろサメがあんな狭い海峡に姿を見せるなんて・・・、思ってもいなかったからなあ。」

餌をガツガツと食べる米助を見つつ、次真は独り言を言った。

「さて、そろそろ嫁さんでも探してやるかな・・・。」

今では絶滅危惧種にも登録されているホオジロザメである。子孫を残させてやらねばと、次真は思っていた。

（キラキラキラキラ）

米助はなんだか嬉しそうだった。

「待ってるよ。すぐに可愛いメスのホオジロザメを連れて来てやるさ。」

次真はそういうと、大荷物を持って歩き出した。

「さて……。北の大地は初めてだが、上手くやってみるかな……。」

今日は次真が北の大地に旅立つ日だ。

何でこうなったかは、また別の物語で語るとする……。



とある北の町・私立碧陽学園・生徒会室

「ふう、今日から新しい日々のスタートって訳だ・・・。」

室内の椅子に座りながら、1人の青年はひとり言を続ける・・・。

今日はこの学校の始業式だ。

2日後には入学式も迫っている。

「会長、知弦<sup>チツル</sup>さん、深夏<sup>ミナツ</sup>、真冬<sup>マフユ</sup>ちゃん……。みんな上手くやっ  
てんのかなあ……。」「

青年は、去年の生徒会メンバーの名前を呟きながら、思い出に浸っ  
た……。。

(ガラッ)

扉が開き、1人の女性が入ってくる。

「杉崎！ やっぱりここにいたか。お前は今日から新・生徒会長なんだ。することはいっぱいあるんだからシャキッとしろ！」

生徒会顧問の国語教師・真儀瑠紗鳥<sup>マギルサトリ</sup>が青年・・・、杉崎鍵<sup>スギサキケン</sup>に喝を入れた。

「あ、すいません。」

杉崎は短く謝る。

「もう始業式が始まるぞ。会長がいなかったら成り立たんだろう。急いで来いよ。」

そういうと、真儀瑠は小走りで体育館へと向かっていった。

「……さて、俺も頑張らなきゃな！」

そういうと、杉崎……、鍵も彼女のあとに続いた。

（第四章・青年は激動のハイスクールライフ高校生活に突入する！！  
・）  
より、抜粋・



でかい魚との馴れ初めと、先の物語のちょっとした抜粋（後書き）

肥後

「さて、今日はここまでです。といっても、一話完結の短編集が基本ですので、次回は全く違う内容になります。」

次真

「ジャンルがコメディになると、とことん適当になるな・・・。」

肥後魚

「まあね。だつてずっと向こうではシリアス一点張りだったからさ、息抜きしたいんだよ。」

次真

「おいっ！！ それおまえのワガママだろ！！！！ 小説はちゃんと書けよ！！」

肥後魚

「いいじゃーん。適当とはいえ、内容は手抜きにはしてないよ。」

杉崎（以後：鍵）

「その割には、第四章で登場予定の俺をなんでこんなに早く登場させたんだ？」

肥後魚

「えっ？ 何でだろうね。まあ気まぐれって奴。」

鍵

「俺の扱いどんだけひどいの！！？ なんか悪いことでもした！！！！？」

肥後魚

「べつにいい。ただなんとなく書きちゃったってことだよ。」

鍵

「ひどっ……！！」



次真

「おいおい、もう少し杉崎先輩のことも考えてやれよな。」

肥後魚

「あゝはいはい。わかりました。」

次真

「（絶対に分かってないな……。）」

会長（以後：くりむ）

「会長としか出てこなかった私って一体……。」

次真

「（更に重傷者がいたな……。）」



自分以外のキャラが登場してたらどう思う？ ・前編（前書き）

肥後魚

「今回は『小説の中の小説』というテーマのもと、書いてみました。」

深雪

「『小説の中の小説』には、私をはじめとした同姓同名のキャラが出てきます。」

四葉

「しかし、本編のキャラ設定とは一切関係はないので、そのころは無視してください。」

肥後魚

「それでは、『蒼神OFF!! 駄弁つたり出かけたりします』、はじめります」

自分以外のキャラが登場してたらどう思う？  
・前編

「ふう、静かだな・・・。」

珍しく、次真は1人で家にいた・・・今日は、他の皆はそれぞれ用事があって留守にしている。

久しぶりの静かな休日だった。

「さて、俺も釣りに行くかな・・・。」

次真も竿を担いで部屋を出ようとする・・・、

キラッ

何かが光った・・・。

「？　なんだこれ？」

それは、クリップだった。

しかし、そのクリップで挟んである紙には・・・。

「『マジックSTORY13』1・天草の釣り旅』・・・？ 小説か？」

タイトルがそう書かれていた。

「えつと作者名はつと・・・。なんだ、杉崎先輩か・・・。」

杉崎鍵・・・、次真が私立碧陽学園に在籍していたときに世話になった生徒会長・・・。

次真から見ればちょっとボケの入ったいい人であったが、前年度生徒会長曰く、

「杉崎が去年一番口にした言葉は、『ハーレムを作りましょう!!』だよ!!」

・・・らしい。

「ふん。まあせっかくだし、ちょっと読んでみるか・・・」

(これより、『小説の中の小説』に突入・・・)

## 1 プロローグ

この宇宙・・・いや、この世にはさまざまな世界がある。それは、幸せな世界であつたり、不幸な世界であつたりする。平和な世界もあれば、戦乱が続く世界もあり、自然豊かな世界もあれば、汚染が進んだ世界だつてある。その世界は別々になつていて、互いに行き来することができる。・・・そう俺は思っている。

しかし、果たしてこの世界は幸せなのだろうか？平和なのだろうか・・・。その基準など、どこにもない。いや、あつたほうがおかしい。さて、描いてみるとしよう。俺の世界を・・・。

## 2 早朝

「おい兄貴、いい加減起きろよ。」

弟の声で俺は目が覚める。まだ眠りたかつたという不満を俺は弟に訴える。



「おいおい、まだ寝かせとけよ、今日は土曜日だろ。」

「馬鹿やろう。今日は釣りに行くっていったじゃねえか。」

はっとして俺は記憶をたどる。そういえばおとといに弟とつりに行くって話したっけ？

「ぎゃああああ！もう4時だああ！！」

「だから言わんこつちやない。しかも今日は深雪ちゃん達を誘ってたる？遅刻したら嫌われるな（笑）」

まったく嫌味言いやがって。こいつは俺の弟の片峰光喜、中二のお調子者だ。学年では結構もてているようだが、本人がまったく乙女心を理解しないので結局かなわずじまいらしい。

「ああもう、うるさいなあ。お兄ちゃん早く支度してよ、四葉もう待ちくたびれちゃったよう。」

妹の声がいっそう俺を焦らせる。妹の名前は片峰四葉、光喜とは双子で同じく中二。学年のマドンナらしいが、気に入ったやつはいないらしく、告白されてもすべてふっているらしい。ちなみに光喜と四葉、そして俺も成績優秀＋スポーツ万能、さらにルックス抜群ときている。（片峰家固有スキルの絶世の美貌が原因だ）・・・が、趣味は変わっていて、光喜は昆虫採集、四葉は筋金入りの鉄オタ（いわゆる鉄子）、そして俺は釣り好き・・・いやあ、どうしてこんなことになったかさえ覚えていない。（おそらく俺が原因と思う）・・・おっと、俺の紹介がなかった。俺は片峰慎二郎、高二だ。クラスでは結構うまくやっている。ちなみに去年もらったバレンティンチョコは1500個だったような気がする（ホワイトデーでお返しするのがきつかった）。

そういつている間にどうにか俺は準備を済ませ、釣竿を取りに物置へ向かう。すでに光喜と四葉は自転車に乗って出発は今か今かと待ちくたびれている。

「よし、それじゃあ駅に行くか。」

「んもう、ちゃんと早く起きてよね。5時03分発の普通に乗り遅れるとこだったよ。」

四葉が時刻表を片手にぶつぶつ言っている。あいかわらず真剣なまなざしだ。

「早く行こうぜ、おれは釣りより釣り場付近の雑木林でカブトムシを採るためにライトトラップを仕掛けなきゃならねえんだよ。」

「まったく光喜も四葉も、今回は釣りが本命なんだぞ！ちゃんと一匹ぐらいは釣ってくれよ。」

すると馬鹿にするなどといわんばかりに自転車をフルスピードで飛ばし始めた。あわてて俺は後を追う。中二になってもお子ちゃまだなと俺は内心思いながら集合場所である熊本駅へ向かう。

### 3 遠いたびへ

「おい、慎君。遅いよー。」

「慎二郎、主催者が遅れるとはなにことだよー。」

「慎く〜ん、遅すぎるよお。」

「片峰、今日は何狙いだ？太刀魚か？ヤズか？」

俺の友達が大声で叫んでいる。まあ遅刻した俺が悪いんだが・・・。

「先ぱーい、お世話になります。こうきくーん、お弁当持ってきたよー。」

「慎兄貴、ご無沙汰で。光喜おせーぞ。」

「慎兄貴、世話になりませ。光喜、DS持ってきたか？」

「真兄ちゃん、よろしく！ヨッチー久しぶり。」

「先輩、今回は負けねえからな。片峰、よろしくな」

「先輩、今日はどこ行くんですか？四葉ちゃん、教えて。」

光喜と四葉のクラスメートが笑いながら叫んでいる。光喜と四葉は笑ってそれに答えている。

「悪かったよ。お詫びに駅弁おごるから勘弁してくれよ。」

「……サンキュー！！……」

「ささっ、早く切符買ってホームに行きましょ。座席にすわれなくなっちゃうから。」

四葉がみんなを急かす。みんなはいっせいに切符売り場へ走っていった。ここであいつらの名前を覚えておこう。まず俺のクラスメート、叫んだ順にいうと、まずは山科深雪。我が高校のダブルマドンナの一人でもおしとやか。成績優秀で非の打ち所がない大和撫子だ。次の奴は八岡啓人、クラスのムードメーカーだ。俺と幼い頃からの腐れ縁で、成績はいつも学年ワースト10に入っている。次は、岡島恋奈、ダブルマドンナのもう一人で、花のある性格は深雪とは正反対だ。恋多き乙女ですぐに心変わりしているらしい。最後は海島三平。その名の通り、幼いころは海辺で育ったらしく釣りは俺と同じくらい好きらしい。次に光喜のクラスメートを紹介してみよう。俺を慎兄貴と呼んでいる二人は大鳥修平と庄平。こいつらは双子で瓜二つだ。ただし庄平は言葉遣いに特徴があるためすぐに見分けることができる。光喜にメロメロな女の子は井山晶子。中学校では四葉について男子からモテモテらしい。四葉とは犬猿の仲らしく、しょっちゅう喧嘩をしている。さらに四葉のクラスメートを紹介しよう。最初に叫んだのは富士浜アリス。フランス人の父を持つハーフで、俺のことを慎兄ちゃんと呼んでいる。俺に挑戦してきたのは浜崎治虫。つり好きの活発な少年で、四葉にかすかな恋心を寄せているようだ。最後は峰崎奈保。四葉の大親友で、最近四葉から鉄道のことを学び始めたらしい、未来の鉄子候補。

とまあ、こんなもんである。

「お兄ちゃん、早く改札通つてよ。」

はっとしてみるとみんながホームからこちらを眺めていて、その中

で四葉が叫んでいる。

「すまん、今行く。」

改札を通ってホームに來るとすでに列車は來ておりみんながややと喋りながら席に座っている。列車を見ると、四両編成の普通電車のようだ。

「815系、1999年の豊肥本線熊本・肥後大津間電化に合わせて登場した近郊型電車で、ほとんどの場合二編成が連結して運行しているようだよ。」

四葉がみんなに解説している。席はオールロングシートなので駅弁は当然お預けのようだ。

「八番のりばから普通列車本渡行きが発車します。ドアにご注意ください」

車掌が吹いた笛の合図でドアが閉まり、列車は動き出した。

#### 4 車内で

列車は熊本の街中を抜け、さらに宇土を通り過ぎる。そしてまず宇土半島の先端である三角を目指す。

「この路線の名前は天草線。元々は三角までの非電化ローカル線だったんだけど、2003年に天草の牛深、さらに長島を経由して阿久根まで開業、さらに電化して天草線になったんだよ。」

またまた四葉の説明があっている。俺は釣りに行くために何回この路線を利用したことか……。いい加減うんざりくるが、せっかく四葉が一生懸命説明しているから、一応聞いている。が、光喜と修平は例外で光喜が持ってきたDSで遊んでいる。また庄平はやることがないらしく、治虫と今日の仕掛けについて話しているようだ。

「ねえねえ、そろそろ今日釣る魚を教えてくださいでもいいんじゃない？ 慎君。」

滑らかな声のしたほうを見ると、深雪が微笑みながら首をかしげている。おっと、まだ今日釣る魚を教えていなかったつけ？ 俺としたことがすっかり忘れていた。

「おっほん、ではみんな聞いてくれ。今日釣る魚を発表するぞ。ちなみに今日は三種類の魚を狙うぞ。仕掛けは種類が違うから、注意するように。」

やれやれ、やっと分かるのかというような顔つきでみんなは俺を見ている。まあ今までこんな待たせたことなかったからなあ・・・。

「今日の本命はコウイカ。さらにチヌとスズキも狙うぞ。」

わからない人のために説明してみると、コウイカは沿岸部でも釣れる一般的なイカのひとつ。イカは餌木を使うエギングで狙うため、ほかの仕掛けとはまったく異なるのだ（といってもただえぎをつけるだけだが・・・）。チヌという名前を聞いても普通の人はピンとこないだろう。チヌとは地方名であって、本名はクロダイ。マダイを黒くしたような魚だ（というよりその通りだ）。とても用心深い魚だが、釣り人には人気のある魚だ。スズキは知っている人も多いだろう。別名シーバス（海のバスという意味）と呼ばれており、大型であることと引きが非常に強いことから海のルアーフィッシングの代表魚的な存在だ。

「おっ、イカときたか。片峰、餌木はどのくらい持ってきたんだ？ この時期は中型主体が多いし、産卵期だろ。」

「へえ、確かにイカは絶好のターゲットだな。先輩、今回は型で勝負っすね。」

治虫は闘志を燃やしている。確かに産卵期である今は数より型での勝負がいいだろう。と、気づくと恋奈が俺の隣に座ってじっと見つめてきている。

「私は慎二郎君と一緒に釣りがしたいなあ。慎二郎君は何を狙うの？」

「俺は・・・。そうだなあ、スズキとイカを両立してやるとするか。」

「じゃあ私もスズキを狙おうっと」

あいかわらず色気を出しまくっている。俺は少し引きながらもほかのメンバーに何を狙うかを聞いて回った。結局、俺と三平はスズキとコウイカ、晶子・光喜・庄平・アリス・治虫は餌木でコウイカ、啓人・四葉・奈保・修平はウキ仕掛けでチヌ、深雪・恋奈はルアーとアジの泳がせ仕掛けでスズキを狙うことにした。

「あーら、四葉さんはチヌを狙うんだ。まっ、せいぜいフジツボのひとつぐらいは釣ってくださいね。」

「なによその言い方、まあでもあなたもイカにスミをかけられるようないじめなことにはなんないですよ（笑）」

「なんですってええええ。」

晶子が四葉に攻撃をしようとし、四葉が迎撃しようとしたとき、  
「ご乗車ありがとうございます。まもなく、終点の本渡に着きます。」

そうアナウンスが流れて喧嘩は終了した。

。そういえば話していなかったな。この世界の魔法のことを……………。

## 5 魔法とは・・・

この世界には、魔法という秘密のパワーが誰にも備わっている（普通にあるような呪文を唱えるようなものもあれば、そうでないも

のもある）。それは日常のちょっとしたことから戦争にまで使われるこの世界の最先端技術といってもよい存在だ。魔法には属性（火・水などなど……）があり、人によって属性は違う。たとえば俺は電気・風・水（氷）系統の魔法を使いこなす。ちなみに強さ（技術・魔力等のステータス）のランクがあったりして、俺はその中で最上位にランクインしている（同じランクでも＋と－で区別があったりする）。光喜と四葉はそれぞれ炎と光系統を得意とし、ランクは総合SS＋である。ほかのメンバーも俺に匹敵するくらいのが天才ぞろいである。こいつらは日常の些細なことでも魔法でこなすことができ、熊本市の人々は俺たちのことを『Free of the high』と呼んでいるらしい。さっき四葉と晶子が喧嘩をおっぱじめようとしたときももちろん魔法を使用していた。もしあのまま二人の攻撃がぶつかっていたら列車は木っ端微塵になっていただろう。まあ俺が防ぐこともできたが……。

攻撃系魔法 相手に直接ダメージを与える。もったも一般的な魔法で、ほかの魔法よりも制御が簡単なのが特徴。物理攻撃と特殊攻撃に分かれる。

防御系魔法 様々な攻撃などを防御し、カウンターにも使える。バインドや結界もこの分類である。

誘導系魔法 不幸な夢を見させたり、指定の場所に行かせたりと誘導系の魔法の総称である。

精神系魔法 精神に攻撃を加え、敵を中身から壊していく残酷なものが多い魔法である。

破壊系魔法 攻撃系魔法のなかでも破壊力のあるものはここに分類される。

特殊系魔法 薬を用いるものから始まり、今では人を救助する魔法が多くなったため、救難系魔法と呼ばれることが多い。

以上が魔法の分類である。ちなみに俺は攻撃（破壊）・防御・精神系魔法を得意としている。

ちなみに先ほど紹介した魔導師ランクの中でもZランクは神の領域に達した魔導師のみに与えられる称号で、日本では俺を入れてたった10人しか居ない。

こう話している間に俺たちは本渡駅を出てバスで通詞島を目指す。通詞島はイルカウォッチングで有名だが、天草下島との間の水道は非常に流れが速く潮止まり以外は釣りにならない。しかし、今ここではコウイカやスズキ、チヌ、アジなどが釣れまくっているらしい。これだけ言ったので今回の旅の計画を全部話しておこう。

一日目 通詞島で釣りを夕方までした後、夜は天草町のロッジに宿泊。（こっそり夜釣りでもしようかと思っている）

二日目 朝早くからロッジ近くの漁港で釣りをする。朝の8時ごろ牛深に向けバスで移動。牛深港周辺で釣りを楽しんだ後、知り合いの家に泊めてもらう。（すでに了承済み）

三日目 牛深港で釣りをするか、その周辺で何かをしているか・・・。夕方に牛深駅から列車（し特急天草）に乗って熊本駅へ。そして各自解散。

以上、こんなもんである。





俺は精神を統一させ、

「さあさあ忘れ物、早く手元に戻ってこい！」

一筋の稲妻が俺の足元に落ちて何かに変わった。もちろんそれは駅弁×13である。

「さっすが慎二郎、簡単に運んできたな。」

「兄貴やつばすげえや。」

「あつ、あさりめしだ。釣りにはお似合いの弁当ね。慎兄ちゃんありがとう。」

みんなが喜んで弁当を取っていく。修平などはもうがつつき始めていて、ほとんどを平らげている。やはり三平と治虫は釣りの方が大切なようで、すぐにエギングを再開している。俺も自分の仕掛けを作り終わり、餌木を海に投げ入れる。

「どうだ、調子は？」

「さっそくついて来てやがる。そろそろ食いつくぜ。」

「俺も同じだ、片峰。ただ型はそんなに大きくはないぞ。・・・おつ、きたきたあー!!」

三平にコウイカがヒットしたようだ。三平はポンピングを混ぜて一気に巻き上げていく。

「片峰、念のためにタモ（網）をとってくれ。」

俺はタモを手渡すと、海中に視線を移す。やがて魚影が見えてきて、タモの中に入った。

「よっしゃあー！コウイカだ。」

「やったね三平さん、見たところ400グラムってとこかな。」

今回初めに釣り上げたのは三平で、いきなり本命のコウイカだ！幸先のいいスタートに俺は徐々に闘志を燃やし始めるのだった。

## 7 入れ食い

「きたきたあ。」

「おれも！」

「またきたぞお！」

俺、三平、治虫の三人はコウイカの群れに当たって爆釣状態になっていた。これまでに俺が5はい、治虫が4はい、三平が5はい釣れている。中でも大きかったのは治虫の580グラムだ。

「よし、これで6匹目だ。治虫、そっちはどうだ。」

「いま投げたばっかだよ。でも先輩、そいつじゃ俺の奴には及びませんね。」

そう、今日は数ではなく型での勝負なのだ。治虫はニヤニヤしながら、餌木をしゃくっている。一方三平はもう群れが去るところと見て、チヌの仕掛けに変え始めていた。

「三平さん、チヌ狙いに変えますか？」

「ああ、もうそろそろコウイカのピークは過ぎるころだからな。治虫、お前も変えたほうがいいぞ。」

三平に促されて治虫もスズキ仕掛けに変え始めた。俺ももうイカは十分楽しんだから早々にスズキ仕掛けの竿に活きアジを付けて海に投げ入れる。と、少し離れたところで釣っていた光喜らエギングメンバーは意気揚々と帰ってきた。

「兄貴、俺たちはそれぞれ一匹は釣ったぜ。そっちはどうだった。」

「おつ光喜、俺たちは合計15匹釣ったぞ。」

「ええー。こっちは4匹なのに・・・。」

「慎兄貴たちはやっぱすごいっす。」

晶子と庄平はがやがや言っている。

「慎兄ちゃん、私もチヌ狙いにするわ。だから仕掛け作って。」

アリスがおねだりしているので、仕方なくスズキの仕掛けを海に投げ入れたままチヌの仕掛けをささっと作ってやった。

「ありがとう、・・・あつ、引いてるよ慎兄ちゃん!!」

はつとして自分の竿を見ると今にも海に沈みそうになっている。あわてて俺は竿を持つとスズキとのファイトが始まった。

「おつ、こりやでかい!!90くらいあるぜきつと!」

竿はへし折れんばかりにになっており、ラインもどんどん出て行く一方である。

「先輩すげえのかけたなあ・・・。」

治虫が啞然としてみている。三平は念のためにとタモを構えて今か今かと待ち構えている。

「おらあ!!!この片峰慎二郎をなめるなよおお!!!!!」

俺は竿を天に掲げて一気に勝負を決めに行く。しかしスズキも必死だ。なかなかラインは巻かれていかない。それでも俺はやりとりをしながらリールを少しずつ巻いていく。

十分後、ついに奴は疲れ始めた。このチャンスは俺は見逃さなかった。一気にリールを巻いてスズキを海面へと追い詰める。

「うへえー!!片峰、こりやでけえぞ!!!」

海面に浮かび上がってきた魚影を見て三平が声を上げる。

「慎二郎君すごいわねえ。」

深雪は感激しながら奴を見ている。

そしてついに、奴は力尽きたのであった。

「きゃあぁー!!!」

四葉や恋奈が叫びまくっている。

「さっすが俺たちの憤兄貴だぜ。」

修平と庄平は自慢げに物語っている。結局この日一番の大物は俺が釣り上げた98センチのスズキだった。俺はこいつを釣り上げた後はみんなの手伝いをしていた。チヌ狙いのグループは、修平と四葉が二匹ずつ上げていて、奈保と啓人はヒットはしたが、ばらしてしまった。治虫はフツコクラスのスズキを一匹釣り、三平はチヌを一匹上げていた。一方深雪と恋奈は泳がせ釣りをやめて、アジのサビキをしていた。しかしそれに鯖が入れ食いし、思わぬ大量となっていた。以上が今日の釣果であるが、この頃になって俺は気づいた。

「おい……。こんなにつぱい、どうやって食べる……。」

「……………あ……。」「……………」

みんな石になった。大量に釣れたのはいいが、もって帰るわけでもないのでクーラーをあまり持ってきてなかったのだ。予想外の釣果だったのでこんな計算ミスが出てしまった。

「まあみんなで食べようぜ。おいしくな！おいしく……。」

啓人は笑いながら言ったが、みんなはどんよりとしている。なにせ俺が釣ったスズキだけで五人前にはなるのだから、食べきれはるはずがない。……。と、誰かが俺の肩をたたいている。見ればかわいい女の子だ。

「ねえお兄たん。私たちにお魚少しちょうだい。」

「こら奈美江。すいません、私たち今日一匹も釣れなかったの……。」

俺はみんなのほうを見て目配せをした。

「はい、お譲ちゃん。みんなで食べてね。」

俺は自分と三平が釣ったコウイカ、さらに修平が釣ったチヌ、それに深雪と恋奈が釣った鯖のほとんどをその家族にあげた。

「本当にありがとうございます。」

「いいんです。どうせ僕らでは全部食べられなかったですから。」

「お兄たん、ありがとう。」

その家族は幸せそうに去っていった。

「うれしそうだったな、あの子。」

「釣りで人を喜ばせられるなんて・・・。」

「釣られた魚は残さず食べてもらえればきっと成仏するよ。」

まさにそのとおりだと俺は思った。魚釣りの極意はそこにあると知った一日は終わろうとしている。

その夜、ロτζジの三階が騒がしい。

「なに人の布団に潜り込んでるのよ。このぶりっ子。」

「お黙りなさい、変なプライド持ってる天狗女。」

「むきいいー」

また四葉と晶子の喧嘩が始まっている。

「おいやめろよ、みんな迷惑してんだぞ。」

「黙れ、このキザ男。」

修平はこの夜何もしゃべらなかつた。

（次真視点に戻ります）

「・・・・。」

次真は喋らない・・・。

そして、再び続きを読み始めた・・・。

自分以外のキャラが登場してたらどう思う？ ・前編（後書き）

肥後魚

「『小説の中の小説』は少々長かったので、前半と後半に分けさせてもらいました。」

次真

「にしても、まさかあいつが小説を書くとは……。」

ベルリン

「言えている。『人は見かけによらぬもの』の例だな。」

次真

「ああ。って！？ お前もちやつかり初登場かよ！？」

ベルリン

「まあな。これからチョビチョビ出てくるぞ。」



次真

「ややこしくなりそうだ・・・。」

肥後魚

「さて、本日はここまで。後半をお楽しみに!!!!」

自分以外のキャラが登場してたらどう思う？ ・後編（前書き）

肥後魚

「さて、続きです。」

次真

「なんで俺は一言も発しないのか・・・。まあ分かる人にはわかります。」

肥後魚

「てなわけで、さっさと始めちゃいましょう。光喜、出番だよ!!」

光喜

「おしつ、久しぶりだ!!!」 『蒼神OFF!!』 駄弁ったり出  
かけたりします』、はじまるぞ!!!」

自分以外のキャラが登場してたらどう思う？ ；後編

（いきなりですが、『小説の中の小説』に入ります・・・。）

9 牛深へ・・・そして戦いへ

「ふああ、眠いなあ・・・。」

昨日こっそり夜釣りをしていたのが響いたらしく、まだあくびがでまくっている。

「あれ、慎二郎君眠いの？昨日あんなに早く布団に入ってたのに・・・。」

「えっ、あはははは。まあね。」

「どうせまた夜釣りでもしてたんでしょ。まったく釣りバカなんだから。」

「馬鹿とは何だ！俺が釣りバカなら四葉は鉄バカだな。」

「なによあ、鉄道を馬鹿にしないでよ！！」

「お前もつりを馬鹿にするな！！」

俺と四葉が言い合っているのを深雪は困った顔で見ている。

「お客様に願いいたします。車内ではお騒ぎになりませんようお願いいたします。」

「あははははははは」「」「」「」「」「」「」

みんなが大笑いしている。俺と四葉は顔を真っ赤にして黙った。

すでにバスは河浦町にはいつている。みんなは静かに外の景色を眺めていたり、DSで遊んでいたりとばらばらだ。俺は頭の中で昨日日本魔法特別総会、通称：NHMSからきた連絡を思い出している。

『Free of the high諸君に連絡する。いま君たちの周りを敵がうろついている。もし攻撃を仕掛けてきたら即殲滅してもらいたい。くれぐれも気をつけてくれたまえ。』

敵というのは、朝鮮魔法本部団、通称：TMDのことである。この組織は世界中の魔法総会から警戒されている極悪魔法組織団の筆頭なのである。前にも戦ったことがあり、その時には修平・庄平の両親が命を落としてしまった。このことをみんなにはまだ話していない。まあ牛深に着いたら知らせてやろうと思う。

が・・・。

「慎君、どうやらTMDが動き出したようね。」

恋奈が真剣な表情でそういった。

「なんだ、俺の心を読み取ったか。」

「いまのあなたの心は隙だらけだったわ。そんなんじゃ、次はあなたが命を失うわよ。」

いつになく真剣だ。いや、殺気がみなぎっている。実のところを言えば、俺たちは魔術師の中では有名で、これまでにいくつかの任務をこなしてきた。・・・時には人を殺したこともある。

「・・・どうやら楽しくやれる旅行にはなりそうにもないわね、お兄ちゃん。」

「ああ、最近模擬戦をしていないから体がなまってるようだ。それに俺は本調子じゃないから一足先に熊本に帰る用意をしよう。光喜・四葉、今回は任せたぞ。」

「けっ、兄貴はずりーな。まあやってみるよ。」



これもひとつの策だ。人気の無いところのほうに他人に迷惑をかけないで済むし、敵も現れやすいからである。

「慎二郎君、寝れる場所はあるの?」

「心配すんな。寝袋持ってきてるから……。」

そしてみんなが寝袋に入った。

夜もふけた頃、俺はかすかな気配を感じ取った。念のためにわざと寝返りをうってみると、その気配はおどしている。

「……来たか……。」

気配はやがて近くなった。

「……はやく殺すか。」

「そうだな、……やろう。」

俺はその瞬間飛び起きて近くにいた三人に挑みかかった。

「!!!!!!」

「消えるおお!!」

俺はスパークバスターをぶっ放した。

「「ぎゃああああ」」

ドサツと音がして三人が倒れた。Sクラス級で殺傷設定Maxだから、たぶん即死だろう。

「あつけないな、これで本当に寝れるな」

「「いいや、まだまだ寝れないよ。いや、二度と眠れなくしてやる」」

「!!!!!!」

「!!!!!!?」

しまったと俺は思った。三人に夢中で後の二人の存在を忘れてしまっていた。

「くっ、ここまでか……。」

そのとき、夜空が急に明るくなる。

「トマホーク、カートリッジLoad!。ダイヤモンドレイザー!!!!!!」

四葉が必殺技を発動する。それに合わせて修平と庄平は渦潮を作り敵に落とす。

「すまねえな、片峰。後は俺たちに任せろ。」

「三平・・・、みんな・・・。」

「慎二郎君は体を休めといてね？」

恋奈がウインクをした。敵の二人は邪魔が入ったというような苛立ちを隠せないでいる。

「ちっ、ザコどもが。・・・まあいい、片峰との決闘の前に遊んでやるとするか。」

みんなを馬鹿にするこの声に、俺は聞き覚えがあった・・・。

11 白熱バトル！！ついに俺参戦！！

「四葉さん、危ない！！」

庄平の叫ぶ声がしたときには遅かった。真っ赤に燃え盛るマグマの弾丸が四葉を直撃した。

「きゃあああ」

やけどを負った四葉はその場に倒れこんでしまう。今回の敵はあまりにも強すぎた。すでに俺が3人倒したが、ほかのメンバーが総出で当たっている2人はまったくダメージを食らっていない。

「ふん、どうした片峰。お前のかわいい妹がボロボロだぞ。」

「桁外れの強さだと思ったらやっぱりお前かつ！！！！ベルリン、リーシェン！！」

ベルリン、俺の最大のライバルにしてTMD最強の魔法エージェントの一人・・・。これまでも幾度となく刃を交えたがいつも引き分けていた。リーシェンはベルリンのパートナーであり、許婚であるらしい・・・。（魔導師ランクはベルリンがZ、リーシェンがS

SS+らしい。)

「どうしてお前らがこんなとこにまで来て襲ってきやがる!？」

「なぜって? お前との決着をつけるためさ、片峰っ」

「・・・ふふふっ、残念だな、俺は今日戦えねえ。」

「なにっ!・・・ほう、では今日は仲間に任せるのか？」

「そうだ、俺の仲間をなめるなよ。一応魔導師ランクはSクラス以上だからな。」

「はははははは、そりや面白い。今日は個人的に仕掛けたからじっくり楽しませてもらうぜっ。だが一応戦闘準備はしとけよ、片峰」

「よそ見ばつかしてんじゃねええ!!!」

光喜と治虫が紅蓮に光る拳をベルリンに浴びせる。しかしベルリンは余裕でかわし、ブラックボールを二人に向けて発射する。

「うわああああ」

悲鳴と同時に光喜と治虫は地面にたたきつけられる。すでに体力が限界に来ており、立ち上がることもすらできない。先ほどのダメージが大きかったのか、四葉は倒れこんだままである。

「四葉、しっかりしろ。」

「・・・お兄ちゃん・・・。ごめん、私達じゃあ力不足みたい・・・。ここにいる中であいつらにかなうのはおにいちゃんだけだよ・・・。」

力ない声で言葉を発する四葉、しかしその直後に立ち上がった。

「でも、まだ戦うよ。その気持ちはみんな同じだから・・・。」

すぐに倒れこんでしまった四葉・・・。俺は自分の身勝手さにやっとなづいた。リーシェンの激烈光弾が炸裂し、深雪・啓人・三平がぶっ飛ばされる。

「おいっ、だいじょうぶか？」

「ばっきや野郎!! 大丈夫なわけねえだろ。」

「やっぱ私たちじゃああの二人の足元にも及ばない。慎二郎君、後は任せたよ。」

「片峰、お前ならやれるさ。」



みんなが励ましてくれる。

「「慎二郎君（先輩）、たのんだよ。」」

「みんな……。」

俺はバリアジャケットを装着し、ファイナルエディションを解除した。

「さて、今日はお前との決着をつけるとしようか。ベルリン……！」

「あははは、そうこなくっちゃなあ。……いくぞっ片峰……！！」

### 13 戦いの一区切り

「駆けよ、氷結の否妻……！アイスサンダーブレイカー……！！」

俺とベルリンのバトルもやがて一時間が経過しようとしている。

この間に俺とベルリンはともに一発つつ破壊系魔法をヒットさせている。どちらもすでにふらふらになってきている。

「甘いぞ片峰……！！隙有り……！」

ベルリンが破壊系魔法最強クラスに属するマグマスラッシュを発動させた。それに対し俺は台風を召喚してそれに対抗する。煮え立つマグマと吹き荒れる風雨が衝突する。

「うおおおおおおお」

「負けるかあああ」

互いにゆずらない。そしてついにどちらも爆発してしまった。

「ぎゃあああああ」

ベルリンの悲鳴が聞こえてくる。しかし俺も衝撃波をまともに食ら

ってしまった。

「ぐはあ!!!」

爆発がおさまったときにはすでにバトルは終わっていた。

「・・・さすがだな、俺をこんなに追い詰めるのはいつもお前だけだ、片峰。」

「お前もあいかわらずだな。いったん一区切りおいてまた戦うとするか。」

「ふふふ、楽しみにしているぞ。」

そついうと奴らは闇に消えていった。

「兄貴い、だいじょうぶかあ。」

光喜らが近づいてくる。

「さつすが慎二郎君ね。私たちとは次元が違うわ。」

恋奈があきれている。どうやら俺は左腕を丸ごと黒焦げにされたりしい。治癒魔法の得意な深雪は早速治療をしはじめている。

「すまねえな、みんなは大丈夫か？」

「ええ、治療は終わったわ。それにしてもよく左腕だけで済んだよね。」

「まあな、でもどうせ大怪我しても深雪が治してくれるだろ。」

「えっ・・・。」

深雪は赤面して去っていった。

「ひひひひ、おあついねえ。」

啓人がにやけている。後ろにいる光喜たちもひそひそと話しているようだ。

「啓人、左腕がないことをいいことにかかったな。」

「まあね、いまならからかい放題だな。」

俺は右腕で鉄拳を啓人と光喜らに食らわせる。

「くくくはあ!!!」

「・・・なめんなよ・・・。」

釘を刺した俺は眠くなったので目を閉じた。今回も何とか戦いは終わった。しかし、本当の戦いはこれからもしばらく続いていくので

あろう。その終わりが来るまで、俺は戦っていると思う。今ある生活を充実したものにしながら……。

「さて、もう熊本に帰るとするか……。」

(これより次真視点です)

「……。出かけるか……。」

ガシッ

次真は小説をおくと、何故か『釘バット』を持って、転送魔法を発動した……。

北の台地・某所

「  
　　）　　）  
　　）　　）  
」

杉崎鍵はご機嫌だった。

なんと、気まぐれで書いた小説がとあるコンクールで佳作に引っかけたらしい。

景品としてもらったお金で、新しいエロゲーを買ったのだ・・・。

「さて、帰ったら早速やってみるかな。」

鍵は買ったエロゲーのパッケージを見つつ、そんなことを呟く。

と、後ろに何かを感じた彼は、ゆっくりと振り返る・・・。

そこには、

「先輩、ご無沙汰してます。」

・・・次真が立っていた。

「よう、次真。久しぶりだなあ、どうしたんだ？」

鍵は陽気に聞くが、

「・・・コンクール佳作、おめでとつございます。」

「エッ・・・？」

知られてはいけなかった・・・。実はこの小説・・・、次真とその周りの人々の日常？を参考に書いたのだ・・・。というか、ほぼ登場人物は実名を使っている・・・。

「いや、これはその・・・。」

ただ、次真の名前だけは、「片峰慎二郎」と変えていた・・・。

「ご、ごめん！……勝手にお前等の日常？を小説にしちまって悪かった！……！」

鍵は土下座して謝った。

「いえいえ、別にそこところは怒ってませんよ？」

次真はやさしく言った……。

それを聞いた鍵は、ホッと胸をなでおろすが……。

カランッ

次真の手には、  
『釘バット』が握られていた……。

「ちよ、ちよっと!! 怒ってないって言ったじゃんか!？」

「ええ、日常？を小説にした点は怒ってません。ただ……」

「ただ………？」

鍵は恐る恐るたずねた・・・。

「なんで俺の名前だけ変えてんじゃあああああああ！！！！！！！！！！」

バキッ







自分以外のキャラが登場してたらどう思う？  
・後編（後書き）

肥後魚

「鍵・・・、ご愁傷様・・・。」

四葉

「あんたがこうなるようにしたんでしょうが・・・。」

肥後魚

「あ、そうだった！」

四葉

「アンタ作者でしょ！？　もう少し自覚を持ちなさい！！　言つとくけどねえ、杉崎鍵は原作からしてこんな風に吹っ飛ばされる役じゃないでしょ！！　もっと吹っ飛ばされ役を考えて書きなさいよねっ！！！！」

肥後魚

「例えば誰がいるんだよ？」

#### 四葉

「いるでしょうが！？」『○魂』のダ○ガネとか、ゴ○ラとか、『禁書○録』の上条○麻とか、いつも不幸な目に遭ってるじゃない！」

#### 肥後魚

「言われてみればそうだね。よし、今度からそいつらに吹っ飛んでもらおうと」

・・・誰かさん達

「」「」「ふざけるなああああああ………」「」「」



体が入れ替わったという、まあベタな出来事が・・・（前編）（前書き）

肥後魚

「さて、今回は三部に分けての投稿となります。」

三平

「一話完結なんていつときながら、結局前編なんてタイトルつけちゃってるな。」

肥後魚

「だってさぁ・・・、なんかそうしないと面白くないモン。」

恋奈

「それを何とかするのが作者つてもんでしょ!？」

肥後魚

「へいへい、分かりました。じゃあはじめようか。啓人、よろしく!」

啓人

「『蒼神OFF!! 駄弁ったり出かけたりします』、はじまるでっ!!!!!」



体が入れ替わったという、まあベタな出来事が・・・（前編）

次真たちが17歳の秋の出来事である。国立肥後高等専門学校では、9月の一大イベント『全熊文化祭』の準備が行われている。このイベントは、熊本市中の高校が合同で行う大規模な文化祭であり、その技術や規模の大きさから全国から人が集まるほどのイベントになっている。

「次真、そこベンヤ板こっちに投げてくれ！」

「りょうかい。」

ブンッ！！

「深雪、ちょっと氷が足りないから作ってくれない？」

「わかった。・・・フリーズ。」

パキパキッ

・・・まあ、一般人たちのお祭りでないことは確かである。

ピンポンパンポン

『学生の皆様にお伝えします。まもなく、時刻は午後10時となり



ます。寮生以外の学生は、速やかに下校してください。なお、校舎内での宿泊は厳禁となっておりますのでおやめください。』

パンピンポンパン

「さて、放送も鳴ったことだし……。帰るか」

「「「りょうかい。」」」

「そうですねえ。まあ仕方ないでしょう。」

山根が熟考しつつも賛成したのを皮切りに、2年C組は解散となった。次真は、深雪・啓人・恋奈・三平と共に学校を後にした。

「あと一週間だな。」

「ようやくって感じがするな。」

「でも、結構短く感じちゃうんだよね。」

「言えてるわ。次真もそう思うでしょ？」

恋奈の問いかけに、次真は少し考えてから、

「ああ、俺も同じだよ。・・・なあ、二人ともちよっとくつつき過ぎじゃ……。」

「「「そうかな（かしら）？」」」

深雪と恋奈は、次真の腕に自分の腕を絡ませていた。柔らかい胸が

当たっている。

「ははは、次真も羨ましい奴だ。」

「ホンマや、なんであいつだけがこうなるんや。恋奈、俺にもそれしてや〜」

「誰がやるもんですか、このド変態関西人が!!!!」

「なんやと           !!!!」

啓人と恋奈はギャーギャー言い合いをしている。

「あれってさ、次真くん。」

「ん？ 何だ？」

「『けんかするほど仲がいい』の証拠でしょ？」

「そうだな。その代表的な例になるな。」

「「誰が代表的な例じゃああああああ!!!!!!」」

イケメン関西人と、茶髪美少女の叫び声が響いた。

深夜・八島家宅

「まったく、恋奈の奴。明日は覚えてろや……。」

啓人は股間をおさえながら寝ている。先程の言い合いの結果、結局恋奈が啓人に対して金蹴りを炸裂させたことにより、お開きとなった。

「あゝあ……。一日だけでエエ……。次真みたいなおモテ男と入れ替わる機会はないんやろうか？」

そんな夢のまた夢みたいなことを考えつつ、啓人は眠りに落ちた。

しかし、その夢は……。

翌日早朝……？宅

「お兄ちゃん！ もう起きてよ！！」

「????」

なんか聞き覚えのある可愛い声がしてきた。というか、お兄ちゃんと呼ばれる覚えはないのだが……。啓人？は目を開け、腕を伸ばす。すると……、

ムニユッ

非常に柔らかいものに触れた。

「えっ……。？／／／／／／」

声の主は思わず黙り込む……。それは……、

「お兄ちゃん……。朝から大胆すぎ……。」

顔を真っ赤にしている四葉の姿だった。しかも、啓人？の腕は四葉の胸を鷲掴みにしている。

「ぎゃああああああ！！！！！！！！！！（ガバッ）ごべんなさー  
——い！！！！」

啓人？はすぐさま土下座して謝りながらも、この後自分に訪れる結末を思い描く。

「（終わった……。俺の人生の終着点はここだったのか……。？  
まあ、最期に四葉ちゃんの胸に触れたからよしとしようかな……。  
）」

が、絶望中の啓人？に思わぬ返事が返ってきた。

「どうしたの、そんなにかしこまっちゃって？ 別にわざとじゃないならいいよ。それに、前は生で触ったことがあるくせに……。／  
／／／／／／」

????

無論、啓人？は身に覚えがない。

「じゃあ、私と光喜はもう学校に行くからね。下に朝食は準備したから、準備頑張ってるね（チュッ）」

四葉は啓人？の頬にキスをすると、軽い足取りで部屋を出て行った。ひとりぽつんと残った啓人？は、ひとまず顔を洗うべく洗面台に向かうが……。、

「あれ？ 俺の家って二階に洗面所があったっけ？」

そんな疑問を抱えつつも、洗面台の鏡を見る。

その瞬間、啓人？は固まった……。。

「えっ……。？」



30分後・通学途中

次真モドキは急いでいた。早く本物の次真と会わなければ・・・、  
そしてこの事件を終結させなければと思いつつ・・・。

「ちつくしょうーーーー！！！！　なんでこうなるんだ！！！」

次真モドキは叫びながら自転車を飛ばす。ちなみに、バイクで行こうと思ったが流石にそれはと思い、自転車での通学となっている。

と、

シュウイツ

ドサッ

自転車がいきなり重くなった。

「つーぐま 乗せて」

恋奈が瞬走を使って自転車に乗ってきた。

「うおっ！！！」

ガシャーン！

勿論、慣れていない次真モドキは倒れた。そして、

ムニユッ

お約束みたいに、恋奈の胸を掴んでいた・・・。

「・・・もう／＼／＼／ ダイタンなんだから・・・。」

なんか恋奈が可愛く見えた瞬間だった。      その時である。

「いたあ！！！！！！！」



なんか凄く聞き覚えのある声が響いた。そこには……、

「なああああ！！！！俺がいるううううう！！！！？？？」

啓人モドキの姿があつた……。

体が入れ替わったという、まあベタな出来事が・・・（前編）（後書き）

肥後魚

「さて、本日はここまでです。まあ体が入れ替わったという話は結構ありきたりですね。」

次真

「まあな。でも、実際のところ被害者は非常に苦労したんだが・・・」

啓人

「もうカンベン・・・。あれはきつすぎるで・・・」

肥後魚

「そう気を落とさずに。・・・さて、なら次回の執筆を始めるかな」

次真・啓人

「「慰めた直後にいうことかあああああ！！！！！！！！」」

体が入れ替わったという、まあベタな出来事が・・・（中編）（前書き）

肥後魚

「はいはい、最後の前書きです。」

次真

「前書きを廃止するのか？」

肥後魚

「その通り！！ まあ正確にはこんな風に会話方式にはしないよ。たまに気がむいたらちょこっとコメント書いてくだけになります。」

次真

「なるほど。後書きは？」

肥後魚

「変わらないよ。ちょっと駄弁っていくよー！！」

次真

「OK。それでは本編に行ってみようー！！」

啓人

「『蒼神OFF!!  
駄弁ったり出かけたりします』、はじまるで  
っ!!!」



「しにても、まさかお前が俺になってたなんてなあ・・・。」

次真・・・、（今は）啓人モドキはそう言った。啓人モドキのほうも、朝になったらいつの間にか八島家にいたらしい。

「それにしても、どうするよ？　学校とかならともかく、いざ任務とかになったら・・・。」

啓人モドキはもつともなことを言う。

「そうだな・・・。早く元に戻らないと・・・。」

次真モドキも同意する。

「『どうしようかなあ・・・。』」

二人はため息をつきながら、これからのことについて考えた。

「あれ？　何してんだ？」

「『！？』」

向こうから青年が歩いてくる。彼は『片峰サンジ』、次真たちの親友の１人だ・・・。

「サンジ！　お前こそ何やってんだ？　学校始まってんぞ。」

「いやさあ、成績も首席取ってるし、部活もやってないからまあ少しぐらいはサボってもいいかなあって」

サンジはあっけらかんに言う。そして、二人はちょっと驚く。

「それにしても、なんでお前等入れ替わってる訳??」

「えっ!??」

「よ、よく分かったな。」

「七年間も幼馴染やってんだ。そりゃあダチの変化ぐらいわかるさ。」

これには少し嘘がある。もともとサンジは洞察力ではNMSでもトップクラスのものを持っているのだ。ちなみに、言い忘れていたが彼の階級は「二等空佐」である。

「まあ決め手は啓人モドキにあるよ。」

「俺に?」

啓人モドキは何がなんだか分からない。

「「関西弁」だよ。お前は関西弁を使ってない。オフの啓人なら大体使っただろ?」

「まあな。・・・って!　なんで俺関西弁喋ったつもりなのに標準語なの!??」

今度は次真モドキが驚いている。

「そうだな……。恐らく、それは言語意識の問題だ。」

「言語意識の問題？」

「人間ってのは、何にしても自分の話しやすい言葉で喋るのが一番楽だ。ということは、啓人が次真になっちゃったのなら普通なら話しやすい関西弁で話すはず……。しかし、現実には標準語を喋っている。」

サンジは続ける。

「これがどういうことかは簡単に説明がつく。つまり、二人が入れ替わったのは体ではなく、精神だ。」

「精神が！？ それはまた何故……？」

啓人モドキが考えている。サンジは更に続けた。

「まあいわば他人の体に精神が入り込んでいる状態って訳だ。ここで、ひとつの現象が発生する。それがさっきの言語意識の混濁だ。これが何で起きるかというところ……、精神が入れ替わった状態でも、人間とというのは「本能」が元の体に残っているものだ。「本能」は、己の体の欲求のままに、無意識のままにはたらいでいくもの……。つまり、まとめて言えばたとえ別の精神が入っても、元の精神の欲求のままに体は制御される。だから、口調は標準語になってるんだ。」

サンジは倫理哲学的な説明を終えた……。



「・・・なるほど。だが、それならおかしい点もある。なんで俺も標準語なんだ？俺だって啓人の体に精神が入り込んでるんだろ？」

そつ、次真（現在：啓人モドキ）は標準語を話している。

「確かに。・・・これは俺の予測なんだが、おそらく次真の精神の意志の強さに啓人の本能が負けたんだと思う。だから、無意識的欲求が遮断されているんだ。」

「俺の本能ってどんだけ弱いのか！？」

次真モドキは若干ショックを受けた。

「いや、これは次真の精神の圧倒的な強さがあって起こっているんだと思う。だから、お前の本能は決して弱くはないよ。」

なんかへんな励まし方になっていた・・・。

一時間後：肥後高等専門学校；2-C教室前

二人はサンジと別れた後、結局登校した。まあ現在の学校は「大文化祭」の準備の真っ最中・・・なので、そんなに気は重くない。

「行くか・・・。」

「ああ・・・。」

意を決して扉を開ける。

ガラガラッ

「「ちいす」」

「あつ、やっと来やがったな！！！！」

「もう遅いよー！！」

「さっき突然いなくなるからびっくりしたじゃない！！！！」

深雪達を始めとするクラスメートに文句を言われながらも、二人は準備を始めた。のだが・・・、

「次真君、そのダンボール取って！」

「「分かった。ッ！！」」

「？　なんで八島まで返事してんの？」

「お、おう悪い・・・。」

「啓人、そこちよつと持ってきてくれよ。」

「「おう！・・・ッ!?」」

「? おいおい、次真までなんで返事してんだよ（笑）」

「わ、悪い・・・。」

そう、入れ替わったことを忘れてしまうことが度々あり、混乱してしまっていた・・・。

「ふう、なんか慣れないなあ・・・。」

次真モドキはまだ混乱している。何しろ、今までにないポジションにいきなりなったというような錯覚に襲われているのだ。

「啓人〜！ 今日も含コンすんの？」

「そうだなあ〜。今回は俺が用意するよ。実は行きがけに「菊女」の子達と約束したんだよ」

・・・サンジと別れてから、啓人モドキは確かに誰かに電話してたが・・・。

「（パリンッ）キャッ!!」

突如、窓ガラスが割れた。どうやら何か石が投げつけられたらしい・・・。

「佐上、大丈夫かつ!？」

近くにいたC組の佐上樹里は短く悲鳴を上げていた。

「えっ!？ う、うん・・・。」

「頭にガラスが落ちてた。ちょっと待ってろ、今落としてやるから。」

そういうと、啓人モドキは佐上の頭をそつと撫でてガラスの破片を取ってやった・・・。

「災難だったな。怪我してなくてよかったよ(ニコッ)。」

「あ、うん。ありがとう・・・//」

ポツ・・・

何故かしら佐上は赤くなっていた・・・。まあ、中にある精神は「世界有数?のモテ男」次真だから当たり前といえば、当たり前だが・・・。

「・・・なんか、今日の八島は雰囲気が違うね・・・//」

「えっ・・・?」

啓人モドキは周りを見た・・・。深雪たちを除く、クラスの女子全員の視線があつた・・・。

「八島ってさ・・・。」

「結構、優しいんだ……。」

「変態って印象しかなかったけど……。／＼／」

「顔も悪くないし……。／＼／」

「いいかも……。／＼／」

なんか、啓人という人間の株が上がりっぱなしなのだが……。何か？

「そうか？　俺は当たり前のことをしただけけど……。？」

「ねえ八島……。その合コン、私も参加していい？」

「私も！！」

キヤーキヤー言いながら、参加人数はどんどん膨れ上がっていく。それを聞いた男性陣はというと……。、

「ヤッホーイ！！　八島のおかげで女子がジャンジャン」

「これで俺達にも春が！！」

歓喜爆発だった……。。

そして、これを見た次真モドキ……。非常に複雑な気持ちになっていた。勿論、自分の評価が上がったのは大喜びなのだが、今自

分の体に宿る精神は次真だ……。これは、素直に喜んでいいのだろうか？ 他人の精神によって自分の評価が高まる……。非常に複雑なところである。

「……。！？ 待てよ……………」

そして、次真モドキはもう一つの重要な点に気づいた……。自分の精神が宿っているのは次真の体だ……。人から見れば、次真としか言えない……。次真は世界有数？のモテ男だ……。……つまり、今の自分はモテ男だ……。

「ねえねえ次真君」

「ん？ 何？」

突然、女子の1人が話しかけてくる。

「次真君は合コン行かないの？」

「え？」

「い、いやね……。次真君が参加するなら私も行こうかと思って……。…」

「!!!？」

次真モドキの推測はだんだん現実味を帯びてきた……。そして、遂に本当の現実になると確信する時が来る。

「次真くん」

薄い銅色の鮮やかな髪、緑の瞳、丁度いい位の大きさの胸、抜群のプロポーション……。

「一緒に帰ろっ！」

啓人（現・次真モドキ）の理想のタイプ……。

「お、おお!!！」

深雪は、いつも次真に言うように次真モドキを誘った。しかし、モドキは初めての経験だ……。

「なんだか硬いね？ ま、いつか!!！」

深雪は陽気に次真モドキと共に教室を後にした……。

「……あいかわらずだね、深雪は……。」

「恨めないよ、ワザとじゃないんだし……。」

「まあ、いい子だからね……。」

女子は深雪の天然さに呆れつつも温かい会話を交わし、

「次真ああああ!!!!!!!!!!」

「なんであいつはああああああ!!!!!!!!!!」

男共はギャーギャー騒いだ・・・。

「（・・・俺が深雪と帰った後って、こうなってるんだな・・・」

啓人モドキは、初めて自分たちが帰った後の教室の雰囲気味わった・・・。

熊本市街・某：喫茶店

次真モドキの緊張は高まるばかりだ・・・。何しろ憧れの女子と二人つきり・・・。他人の体（彼氏相当）でとはいえ、やはりこの鼓動の高まりは抑えがたい・・・。

「ねえ、大丈夫？」

深雪は気遣うように言った。

「へっ！？　お、おお、平気だぞ。」

慌てて返事を返す・・・。

「にしてもさあ、啓人もあんな風にすればいいのにね・・・。」

深雪はなんとなく呟いた。次真もそれに頷い・・・。

「????　啓人も？」



明らかにおかしい言葉だ。

「そつ、啓人もね。目の前の。」

ガシャーン！！！！

見えない何かが割れるような音がした。

「・・・何時から気づいてたんだ？」

「今日最初見たときから。一目見て分かったよ。」

彼女の洞察力は一体何？　と思いつつ、次真モドキは質問する。

「じ、じゃあ俺の姿した正体も？」

「次真くんが精神が入り込んでるんでしょ？　さっきの樹里に対する接し方で確信したよ。」

凄すぎた・・・。

「なら、なんで合コンとか止めなかったんだ？　次真が他の子といちやいちゃしちゃったりするんだぞ！？」

次真モドキは訳が分からない。

「いいの。」

「えっ？」

さらに、訳が分からなくなった……。

「別に私は次真くんを独占するつもりはないよ。」

そう。それが二人の愛なのだ……。片方が自分以外の異性といちやいちやしていても……。

たとえ、×××していても……。自分を一番に思ってくれればいいのだ。

「だから、私は一度も次真くんの合コンとかを止めた覚えはないよ。」

「そっついわれて見れば……。」

次真は普段から美女が回りにいるので、あまり合コンには参加しない。たまに参加すると、案の定ほとんどの女子と仲良くなっている。まあ人格と外観の賜物だろう……。

「確かに、深雪ちゃんは次真が他の子と目の前でキスしても別にないよね。恋奈とか四葉ちゃんは強引に引き離したりするけど……。」

それが普通の恋する乙女の反応だろう……。

「だから、私は一番になつてればいいの　私だって、他の男とたまに過ごすわよ。でも、一番は次真よっ！ー！」

深雪は、素晴らしい笑顔でそう言った。

それを見た次真モドキ・・・、もとい啓人は深雪と次真の絆の強さを改めて認識した。と同時に、自分がその間に入り込める余地はないとも思った。

「（まっ、これからは友達としてやっていきますか！ー！）」

そう、心に誓うのであった・・・。

体が入れ替わったという、まあベタな出来事が・・・（中編）（後書き）

肥後魚

「さて、啓人の理想のタイプは深雪でしたー!!」

次真

「俺はどう受け止めればいいんだ？」

肥後魚

「さあ・・・？ まあ自分で考えてみてくれ。」

次真

「了解。なら今日は手っ取り早く終わろうか。」

肥後魚

「次回は『入れ替わり編・後編』です。お楽しみに」

体が入れ替わったというベタな出来事が・・・ (後編) (前書き)



「可愛いよねえ!!」

「アイドルなんかじゃないよ・・・／＼／」

「褒めすぎ／＼／」

女子のほうも、啓人モドキ・・・もとい次真が用意した暴走族『蒼雷峰』のメンバーと楽しくやっていた・・・。

「さて、なんか新しいカップル誕生の雰囲気か漂ってるな。」

成り行きでついてきた三平は、この様子を眺めながら言った。

「まっ、いいんじゃないか?」

こちらも成り行きでついてきたサンジが返した。

「・・・ところで、いつ入れ替わったんだ、あいつら。」

「・・・三平も、入れ替わったことに気づいていた・・・。」

「お前も気づいてたのか。そうだなあ、多分今朝だろうなあ・・・。」

サンジは驚きつつも答えた。とここで、次真は「学園天国」を選曲したらしい。

「H E Y H E Y H E Y H E Y H E Y!!  
!!!」

「「「「H E Y H E Y H E Y H E Y H E Y  
Y!!!!!!」」」」

なんか盛り上がりが最高潮に達しつつあった。

啓人は深雪と別れた後、次真の家に帰っていた。

「四葉ちゃんと光喜はまだのようだな・・・。」

一人、テレビを見ている。

「楽しかったなあ・・・。もう、十分だな。次真になれて、よかったよ・・・。」

そのまま、眠りへと落ちた・・・。



『・・・あいつもこいつもこの席を　ただ一つ狙っているんだよ  
！！』

ふと聞こえてきたのは、「学園天国」だった・・・。見てみれば、  
周りにはクラスメートたちがいる。

「おい啓人、起きろよ！！」

「まだまだこれからだぜ！！」

「あんたが寝てどうすんのよ！！」

「啓人くん、歌おっ！！」

。なんかみんな楽しそうだ。でも、こんなことしたおぼえはない・・・。

「・・・そうか。次真のやつ、やってくれたな・・・。」

感謝しつつも少し羨ましい・・・。自分ならこんな雰囲気是自力で  
作ることは中々出来ない。が、彼はやってのけた。

「さて、せっかくの場だ。楽しませてもらおうか……。」

啓人はそう言うと、マイクを持って叫んだ。

「お前らああ……！　これから盛り上がってくぞおおお……！！」

「「「イエーーーーーイ！！！！！！！！」」」

合コンは盛り上がりが最高潮に達する。

次真が目を覚ますと、そこは自分の家のリビングにだった。

「戻ったか……。」

こちらは落ち着いて現在の状況を受け入れた。今頃、啓人はドンチヤン騒ぎの真っ只中だろうと想像しながら、テレビのスイッチを切った。

「さて、準備するかな……。」

いつもの釣りの準備ではない。MASAMUNEを腕から外した。

「MASAMUNE、セットアップ。」

（セットアップ！）

シュンッ

バリアジャケットになった次真の表情はいつになく真剣なものだった。そのまま外に出ると、夜空に飛び上がった。

『存在』は気づいた。何かがこちらに恐ろしいスピードで向かってくる……。魔導師のようだ。とてつもなく巨大な強さを誇っている。

「とうとう気づかれたか。」

「最初から分かってたよ。」

次真はすぐに返事を返した。

「やれやれ。相当舐められているな……。」

『存在』は少し馬鹿にされたような感じがした。

「お前は何だ？」

「なんとも言えんな。というよりも、何かでなければいけない理由でもあるのか？」

自分が何者かなんてどうでもいいという風に、『存在』は返した。それが、最後の言葉だった・・・。

「水斬！零式！！！」

水の刃が飛翔する。『存在』避けようとするが、

「残飛追従！！！！！」

シュウウウウッ

刃は軌道を変え、『存在』へ向かう。

ザシュッ

「ガハッ（ゴボッ）！！！」

『存在』左肩を斬られ、吐血して倒れた。

「呆気ないな。」

次真は平然と言った。返り血が少々ついてはいるが、その色は赤ではない。

「ふん……。おれは所詮作られたもの、壊れても何も感じない……。」

『存在』は弱弱しく言葉を吐いた。もう、長くはない……。

「お前のご主人様は誰だ？」

次真は疑問をぶつけた。実のところ、この『存在』が誰かによって作られたことは初見で気づいていた。

「教えられんな……。自分で、探すがいい、さ……。」

スウウウウ……

『存在』は消滅した。後に残ったのは、抜き身のMASAMUNEを持った次真だけだ……。

「成る程……。これを使って……。」

次真は足元に落ちている道具を眺めて言った。それには「ヒューマン・クロス（精神交差）」と書かれていた。これを使って、自分と啓人の精神を入れ替えたらしい……。そして、次真は『存在』の

最後の言葉を思い浮かべて考えた・・・。

「また、残酷なことが起こるのか・・・？」

考えながらも、そう独り言を呟かずにはいらなかった。

体が入れ替わったというベタな出来事が・・・（後編）（後書き）

肥後魚

「さて、これで『入れ替わり編』は完結です。次回は、非常に特別な作品となります。」

次真

「こつちの小説は一話ごとが短いと思うかもしれないが、そのところはご理解を！！」

肥後魚

「実は今回はゲストをお呼びします。それは誰かというと・・・、読んでのお楽しみってコトで！！！」

次真

「それじゃあ、バイバイ！！！」

釣りってのは、出会いが多い（前書き）

さて、特別ゲストは誰なのか・・・？

どうぞお楽しみください。



釣りつてのは、出会いが多い

某世界・溪谷の川辺

次真は今日も釣りに来ている。今回はヤマメを狙っているが、既に5匹釣り上げていた。

「全部20cmオーバーか。ここは良型が多いな。」

型のいいヤマメが釣れたので、ご機嫌である。このポイントを記憶の片隅に置いておこうと、メモ帳を取り出して記録していた。と、

「本当にこっちゃんか!!」

人の声が聞こえた。しかも、大声だ。

ザアアアア...

サッ

ヤマメは非常に警戒心の強い魚である。一度危険を察知したら、その日は二度と釣れない……。次真もそれを心得ているからこそ、いままでとても静かにしていたのだ。そんなときの大声……。次真は少し殺気立った。

「ちっ……。すこし黙らせてやるか……。」

そう言つて、声の方へと向かった。

二人の人間が話している。

「本当にこつちやんか!!? 間違つてないよな!!?」

黒髪・黒眼、髪はボサボサ……。着物を少しくずして着ている少年が叫んでいる。

「もちろんだつ!! 絶対合つてる!!」

もう一方のちよい茶色がかつた黒髪と黒目、結構な癖ツ毛な青年も、負けじと言い返す。

「お前がそう言つて合つてたこと今まであるか!？」

「なつ!! 洋基、お前はいつてはいけないことを言つた……。」

「ほう、ならどうするつて言つんやあ?？」

まずい空気になりつつある……。。

「いっぺん黙らしたるわああああ!!!!!!!!!!」

「やれるもんやらやってみい!!!!!!!!!!」

ガキイイイイイン

キンッ

カッ

互いに刀を抜いて、けんかが始まった。二人とも動きは早い。

しかし、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

何か恐ろしいものを感じた二人はピタッと動きを止める……。後ろから、とてつもない殺気が漂っている。

「おいコラ、その二人……。」

「は、はいいいい!!!!!!」

振り返ると、なんか巨大なハンマーを持った金髪オッドアイの青年が立っていた……。

「人の楽しみを、邪魔したな？」

「へっ!？」

無論、身に覚えがない・・・。

「なんで山の中で大声を出すんだ？」

いや、山の中だからこそ大声を出せるのでは？ と思いつつ、二人は後ずさりを始める・・・。

ドオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

その動きは、ハンマーの一振りで止まった。そして、青年・・・。  
次真は言った。

「少し、頭を冷やそうか？」

某・白い悪魔さんの裏の決め台詞を言った・・・。

「いやだあああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドガァアアアアアア！！！！！！！！！

轟音が、響き渡った・・・。

一時間後：川辺

あの後、やりすぎたことを互いに詫びて、三人は次真が釣ったヤマメを焼いて食べていた。

「いやあ、それにしてもあの攻撃は凄かったなあ・・・。」

「どうもすいません。釣り関連のことになると、どうしても熱くなっちゃうんですよ。」

「気にせんでや。元々不用意に大声出した俺が悪かったんやし。」

食べつつも、話は続く。

「そうそう、まだ自己紹介をしてませんでしたね。俺は「片峠次真」、16歳です。」

「私は『光軍』といます。ちょっとした小説を書いていまして、実は今日山に入ったのも小説のネタ探しのためなんですよ。」

光軍はそう言つて苦笑した。

「ホンマにつまらん小説やけど、まあ俺も手伝つてゐるわけや。  
あ、俺は「浅倉洋基」<sup>アサクラヒロキ</sup>言つもんや。よろしゅうな!!」

「ああ、よろしく!!」

次真と洋基は握手を交わした。

「次真つて言うんか。ならあだ名は『ツツグー』でええな。」

「はっ?」

次真は理解できない。

「コラアアアア!! 初対面の人にあだ名付けない!!」

光軍がすかさず突つ込む。が、当の洋基はお構いなしだ。

「ええやんけ。付けて減るもんやないしな。」

「ま、まあいいけど・・・。」

「ホント、ごめんね・・・。」

光軍は困惑する次真に謝った。

その後、三人は場所を変えて釣りを始めた。狙いはヤマメからオイカワに変更している。

「おっ！？（シュバツ）」

ピチピチピチッ

洋基がウキが沈んだのにあわせると、型の良いオイカワが釣れていた。

「すげえじゃん！ 洋基！！ 七連続ゲットだぞ！！」

「おおお！！ 釣りって初めてやけど、たのしゅうて仕方ないで！！！」

洋基もハイテンションだ。ちなみに、次真は既に50匹は釣っている……。

「さすがツツグーや。手馴れてるんやな！」

「いやいや。初めてでこんなに上手いのは洋基ぐらいだぜ。俺だって最初はボウズだったし。」

二人が盛り上がってる中……。

スウウウウウ……

シュバツ

・・・・。

「ああああああ!!!!!! また逃げたああああ!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!」

光軍は、一匹も釣れていない・・・。

「・・・・。」

二人は、かける言葉が見つからずにいた・・・。

「・・・なあ。光軍先生って、不器用なのか？」

「んにゃ、そんなにではないで・・・。ありゃ、魚に見捨てられて  
んとちゃうか・・・？」

洋基の意見に対し、次真も頷く・・・。そして、遂に・・・

「もう嫌だああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ポイツ

とうとう、竿をほっぽり出してやめてしまった・・・。仕方なく、  
二人も納竿した。

「光軍先生、元氣出して・・・。」



「そうやで。釣りができんくらいで落ち込むんは気が小さいで!!」

「・・・そうですね・・・。開き直ります・・・。」

何とか、光軍は立ち直った・・・。

「にしても、先生を見てるとあの人を思い出すなあ・・・。」

「「えっ?」」

次真はふと呟き、それに対して二人は疑問を露わにする。

「いやな、いるんですよ。俺の知り合いに、本当に釣りが下手で魚から見捨てられた人がね・・・。」

そう言つて、次真はふとあの男の顔を思い浮かべた・・・。

「へえ・・・。そんな人がいるんですね。」

「ええ。しかも、その人は何に対してもやる気がなくて、いつも魚の死んだような目をしていて・・・。」

「えっ!! それなら、こっちにも似たような人がいますよ。」

「マジですか!!」

「マジや。そいつは普段はそんな調子何やけどな・・・。一度本気

を出したらとてつもなく強いんですよ。」

「おお！！ それも同じだぜ。それでさ、まさかとは思っけど・・・その人って、『天パ』？」

「ビンゴやつ！！！！ そのとおりやで！！！！」

「すごっ！！ なんか偶然とは思えない一致だ。」

「そうですね偶然とは思え・・・おおおお！！！！」

突然、光軍は叫んだ。

「これだ！！ ネタが見つかった！ やったああ！！！！」

「おっ！ それなら早速・・・」

「もちろん！！ 早速帰って執筆開始だ！！！！」

「なら、ここでお別れだな。」

「そうやな。」

「そうですね。」

三人は互いに手を出して、握手した。

「また、会おうな！！」

「もちろんや！ 今度はもっと楽しゅうしようや！！！」

「次の機会に、また！！！」

そして、次真は転送魔法を発動させた。

「うおっ！？ ツッグーって魔法使えたんやな！！！」

「そうさ。魔導師をやってるよ。」

「なんか、最後に一番重要なことを知ったような……。」

光軍は驚いている。そして……。

「またな~~~~！！！！！！！！！」

「「また会おうや（会いましょう）！！！！！！！！！！」」

キイイイイイイイイイン

次真の姿は消えた。

「さて、帰ろうか。」

「せやな。帰って初めよか!!」

光軍と洋基も、山を後にするために歩き出した。

日本国：熊本県熊本市・片峠家前

キイイイイイイン

次真は家に帰ってきた。すると、

「おっす、邪魔してるぜ。」

「おっ、銀さん久しぶり。」

異世界の江戸・歌舞伎町で万事屋をやっている侍、『坂田銀時』が  
来ている。ヨロスヤ

「あ、そうか。確か、こっちに出たチョコパフェの新作を食べに？」

「そん通り。今食ってきたとこだよ。」

今日は、熊本の人気喫茶店；『洗馬橋』で新しいデザートの試食会があった。その中に、チョコパフェもあったのだ。・・・銀時は、大の甘党である・・・。

「で、味はどうだったの？」

傍で聞いていた四葉が聞いた。

「そうだなあ・・・。まあまあだったかな。俺的にはもうちょっと甘いほうがいいな。ビターチョコの割合が強すぎて、苦かったからな・・・。」

全くの甘党だと思いつつ、次真と四葉は顔を見合わせて苦笑する。  
・・・ここで、次真は別の質問を試みる・・・。

「銀さん・・・。」

「何だ？」

「もし、違う世界にもう一人の・・・。いや、幾人もの銀さんがいたら、驚くかい？」

静寂が、室内を支配する・・・。

「まあ、いいんじゃない？」

「はっ？」

「いいんじゃないの？　いてもさ。俺は会ってみたいなんて思わねえけど、まあいたっておかしくないしな。」

「一見無気力そうだが、中身がしっかり詰まっている返答を銀時は返した。それを聞いて、次真はホッとした。」

「流石、銀さんだな。」

「？　なんだそりゃ？」

銀時は意味が分からないようだった。次真はそのまま二階の自室のベランダへと向かう。

ヒュウウウウウ・・・

風が、少し吹いていた。

「光軍、そして浅倉洋基……。どっちも、一癖二癖もありそうな人だったな……。」

そう言って、次真は再び階下のリビングに下りていった。

釣りつてのは、出会いが多い（後書き）

肥後魚

「いやあ。にしても、光軍さん、浅倉洋基くん、ありがとござい  
ました!!」

次真

「作者が勝手に性格を改造してなかったか？ そこんところは謝つとく。」

肥後魚

「失礼なっ！！！！これでもあちらの設定に基づいて執筆したよ。」

次真

「ならいいけど・・・。」

肥後魚

「そして、次回からは二回にわたって『ネブトクワガタ編』をお送りします。」

次真

「その主役はなんと……」

光喜

「この俺、片峠光喜が務めさせてもらうぜ……!!」



次真

「こいつの初主演、是非読んでくれ!!」

肥後魚

「それではまた次回にっ!!」

## ネプトクワガタ騒動・前編（前書き）

正直言つて、前書きは読んでおいたほうがいいです。というか、説明を見てください。この話に出てくる『ネプトクワガタ』の生態が非常に重要になります・・・。

『ネプトクワガタ』・・・・中国に生息するラエビコリスネプトクワガタの亜種として位置づけられている。小さいために生態に関心がある愛好家以外には関心を持つ者が少なく、一般愛好家向けの書籍などで取り上げられることも稀である。

広葉樹を好む他のクワガタムシと違い、マツなどの針葉樹の朽ち木のシロアリの活動で生成したフレーク質の部分にもよく産卵することが知られている。これは冒頭に記したようにネプトクワガタ類の幼虫が食べるのは朽木そのものというよりも枯れ木をシロアリが食べて分解し、排泄することによって形成された土状の腐植であり、もともとの材の樹種の影響をあまり受けないこと、シロアリが好んで食べる材のひとつがマツであり、マツの枯れ木はかなりの高頻度でシロアリの摂食活動に曝されていることなどによる。

成虫の食物は大型のクワガタムシの多くと同様に広葉樹から出ている樹液であり、成虫は針葉樹の林に生息するというわけではない。シロアリの活動が必須なため、繁殖できる木の好みがうるさく、特定の環境でしか採集できないとも言われる。

上のこと、よく踏まえたらうえて本文を読んでみてください・・・。

## ネプトクワガタ騒動・前編

とある山の奥地・・・そこには森が広がっていた。ただの森ではない。人によって植えられた特定の広葉樹のみが生える森。いわゆる、雑木林だ・・・。そんな雑木林に、人影が一つ・・・。現在時刻は5:00、普通の人ではない。

「ふう・・・、今日は結構採れるなあ。」

高校生くらいだろうか？ 若々しい声が聞こえる。が、その服装はとてもじゃないが今時とは言えない。おまけに、手には小学生が持つてそうな虫取り網と、虫かご・・・。その中には、子供達の憧れの虫が・・・。

「おつ！！ ミヤマだ。これで50匹目だ。」

そういつて、側の木にいたミヤマクワガタを捕獲した。体長は約7cmといったところだろうか。

「さて、もう帰るとするかな。」

少年、片峠光喜は来た道を戻り始めた。彼は、恐らく世界有数の「昆虫オタク」である。特に、カブトムシやクワガタといった虫には目がなく、NMSの仕事や学校の合間を縫ってはどこかしらの山に採集に行くのだ。元々、彼に虫の楽しさを教えたのは兄の次真であるが、光喜のそれは既に彼を凌駕している。

「そうだ、あそこによってみるか……。」

そういつて、彼は行きがけに見つけておいた朽木に向かう。アカマツの赤枯れだ。程よく朽ちている。光喜は背中のリュックから鉋を取り出すと、軽く朽木を叩いた。

コロンッ

黒い何かが出てきた。背中には太いスジ。頭には顎がついている。クワガタだ。しかも、ただのクワガタではない。

「やっぱりいたな、ネブトクワガタ」

ネブトクワガタ……。光喜が気に入っているクワガタで、普通の人ならばまずなんの興味も示さない、マイナーな種類だ。しかし、一部のオタク間では結構ブームとなっている。

「オオクワにはない魅力……。それが分からないんだよな、一般人は……。」

分かれというのが、無理難題だ……。

その夜：片峠家中庭

「てな感じで、これを持って帰ってきたんだよ。」

「なるほど、凄いもんだな。」

光喜は結局、あの朽木を丸ごと持って帰ってきた。それには恐らく100匹はネブトクワガタがいるらしい……。

「まあ、ネブトは発生が局地的だからな。そのくらい居てもおかしくはないよ（笑）」

次真は苦笑しながら言った。光喜は有頂天なようで、なんか雰囲気 गयाけに明るい……。

「で、これは何時解体するんだ？」

「そうだなあ……。俺は明日から2日間出張でいないから、まあ3日後くらいにするぞ。」

「わかった。俺も多分空いてるから手伝うよ。」

「サンキュー」

そついう話をしつつ、二人は家の中へと入っていった……。その頃、朽木周辺では……、

モゾモゾ

カサカサッ

白い極小の悪魔が、片峠家に向かって侵攻を開始した・・・。

翌日

次真はリビングでゆっくりと過ごしていた。光喜は既に出張に出発した。四葉はキッチンで朝食の後片付け。もう少しすれば、深雪・啓人・サンジがやってくる。別に特別な理由はない。オフの日は、いつもこんな感じだ。

「あれ？　なんだこれ？」

キッチンの方からだ。次真は行ってみることにした。

「どうしたんだ？」

「お兄ちゃん、これ何？」

「ん？」

見れば、キッチンの柱に穴が空いている。しかも、そこには木屑が・  
・。

「なんだろうな？」

「わかんないよね？」

二人は顔を見合わせる……。と、

ピンポン

「「来たぞ（よ）（ぜ）〜！！」「」

どうやら3人の到着のようだ。二人は柱のことは後回しにして、玄関へと向かった。・・・その後、柱の穴から1匹の白い何かが出てきた……。と思えば、また1匹、2匹、3匹……。

「いらっしやい。」

「結構早かったな。」

「まあな。」

「なんか今日は飛びたい気分だったから。」

「飛んできたっちゅうわけや。」

「なるほど。」

「ま、そんな時もあるわね。」

五人で駄弁りつつ、リビングに向かう。

「そういえば、あれが完成したんだよ。」

「あの新しい釣竿のことか？」

「ほお、早速見たなるな。」

「だったら見に来るか？」

「「勿コース」」

こうして、男性陣3人は次真の部屋へと行き先を変えた。女性陣二人は苦笑しつつ、

「じゃっ、私達はお茶でも飲もう。」

「そうだね。」

リビングへと向かった。



## 次真の部屋

新しい竿は、どうやらルアーロッドらしい。シーバス（鱸）用だろうか。長さは2m丁度くらいだ。素材はカーボン。軽かった。

「次真は相変わらずだなあ。いい竿作りやがって。」

「まだまだだよ。これからもっと精進しなきゃな!」

「言いよるな、あまりめり込み過ぎらんように注意せなあかで。」

「ああ、分かってる。」

その時・・・。

『ぎゃあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!』

階下から悲鳴が聞こえてきた。尋常ではない。3人はすぐさま1階のリビングへと急行する。

「なんや!? 何があつたんや!」

「襲撃か!」

「どうしたんだ!？」

リビングのドアを開けると・・・、信じられないものが広がっていた・・・。

カサカサカサカサ

ウジャウジャウジャウジャ・・・

ゾワゾワゾワゾワ・・・

白い何かが、床を埋め尽くしていた・・・。何千、いや何万とも言  
うべき数のソレが、蠢いていた・・・。

「いやあああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「何よこれえええええええええ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

深雪と四葉は、かろうじてテーブルの上にのぼって難を逃れてはい  
たが、ソレらは次々とテーブルの上ってこようとする・・・。

「深雪っ、四葉っ!!!!!!」

「次真くうううううん!!!!!!!!!! 助けてええええええええええ!!」

「お兄ちゃあああああん!!!!!!!!!! 気持ち悪いよおおおおお!!」

完全に混乱していた。そんな中、サンジは冷静にこう言った・・・。

「『シロアリ』だな、これ・・・。」

次真はショックだった。ある程度推測はすぐにつくが、本当にそうだったとは・・・。

「なんや、そのシロアリて?」

「アリという名前がつくが、その正体は社会性を持つゴキブリの仲間だ。よく朽ちた木を好んで住処とし、その住処は時には木造の家だったりする・・・。」

「そ、それってつまり・・・。」



――光喜の出張先――

「　　」

光喜はご機嫌で仕事をこなしていた。帰ったらお待ちかねの朽木の解体……。楽しみで仕方がないのだ。

「早く終わらせて帰ろうつと！！！」

いつもの何倍くらい早い！？　って位のスピードで、報告書を書く光喜であった……。

## ネプトクワガタ騒動・前編（後書き）

肥後魚

「食われてます。家が・・・。」

次真

「これって、もしかして実話？」

肥後魚

「ああ、そうだよ。四年ほど前に、被害に遭ってね。その時はやばかったもん・・・。」

次真

「思い出したくもないだろうから、深くは突っ込まないどく・・・。」

肥後魚

「さて、次回は後編です。なんでこんなことになってしまったのか？ 真相が明らかになります。そして、沈静化するかってところです。」

次真

「じゃあ、またな～～～！！！！」

## ネプトクワガタ騒動・後編（前書き）

突如大量発生した白い虫の大群！！！！

その猛威が次真たちの家を襲う！！！！

『イエシロアリ』・・・・イエシロアリ（家白蟻、*Coptotermes formosanus*）は、シロアリ目（等翅目）・ミゾガシラシロアリ科に分類されるシロアリの一種。日本にごく普通に生息するシロアリである。別名、タイワンヒメシロアリ。大きさは有翅虫で7 - 8mm、働きアリで5 - 7mm、女王アリは大きいもので40mmに達する。ヤマトシロアリに似るが、全体的に大きい。兵隊アリは頭部は卵円形で扁平、大顎は鋭く、彎曲している。また、有翅虫が頭部が褐色で胸腹部は黄褐色である。他のシロアリと同様社会性昆虫で、集団をなし、枯れ木や朽木を食べる。その内部に巣を作る。特に乾いた材を好む。巣は材の中にいたるところに掘られた巣穴からなり、材の外に巣穴を続け、あちこちの材へとトンネルを繋げ、大規模に食害する。





「あああああああああ！！！！　家があああああ！！！！！！！！」

「こいつ等に食われるううううううう！！！！！！！！！！」

次真たち5人は、ただただ悲鳴をあげて逃げ回るばかり……。次真はシロアリや毛虫といった類の虫に弱い。深雪と四葉の女性陣は当たり前。啓人とサンジも対処法が思いつかない……。そして、その間にも……

ガサガサ

サワサワサワサワ

シロアリの侵略は止まらない。もうなんだか非常事態宣言じゃ済まないようなことになってきた。

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！　柱からも出てきたああああ！！！！！！」

「床が抜けてるうううううう！！！！！！　どんだけ食われてんのよおおお！！！！！！！！」

特に、ここの住人である次真と四葉はシロアリ自体の恐怖以前にこ

の家の根本的な危機に対して恐怖を抱いている。この片峠家は、外からは普通の一軒家にしか見えないが、中には様々な隠し扉や隠し部屋があり、複雑な造りとなっている。しかも個々の趣味の為の部屋もこの家にあるため、もしシロアリによってこの家が崩されるようなことになれば・・・、

「（俺の釣り道具が・・・）」

「（私のNゲージ鉄道模型が・・・）」

「全部瓦礫になっちゃうよおおおおお……！！！！！！！！！！」

L

てなことを心配していた。

「って!?! 今はこのシロアリをどうにかしろよおおおおお!?!」

サンジの決死の叫びも一人には届かない。

「いっそのこと殺虫スプレーをつかったらどうだ!？」

「駄目だ！！ そんなことしたら光喜のクワガタが全滅してしまう！  
！ あいつにとってクワガタは全てだ！！！」

「でもどうすんの！？ もう床はシロアリで埋め尽くされてるよ！  
！！ 光喜くんには申し訳ないけどスプレーを使っしか方法は・・・」

「無理だ・・・。」

崖っぶちの論議に鶴の一声が響いた。

「シロアリはなにも、床に出てきてる奴等ばかりじゃない。柱や地中に潜った奴等だってウジャウジャいる。いや、むしろそっちのほうが多いさ。」

「っ、つまり・・・。」

「殺虫スプレーでは奴等の根絶は不可能だ・・・。」

・・・。

「そんなああああああ！！！！！！！！！！」

「最後の希望がああああああ……！！！！！！！！！！」

「いやあ ああああああ！！！！！！！！！」

個々、絶叫……。最早、なす術なしとなった。

NMS西熊・管制塔・転送ポート

1人の女性が降り立った。茶色の長髪を、サイドポニーにしている。

「あれ？ 次真君たちはいないのかな？ ま、家に行けばいるよね。」

L

彼女は戸惑いながらも、次真の家へと向かった。

異世界；某：万事屋

「ああああ！！！！！」

眼鏡をかけた青年が叫んだ。眼鏡しか特筆すべきところがない……。

「うるさいねダメガネ。静かして寝てるがヨロシ。」

チャイナ服の少女が面倒くさそうに注意する。傍らには傘がある。

「誰がダメガネじゃあああ！！！！ おっと！！ そうじゃなくて……」

「????」

「次真君の家に、アレを忘れちゃった……。」

## 片峠家

諦めよう。もう、無理だ。奴等にこの家は破壊され、釣り道具は瓦礫と化す……。運命なんだ、これ……。

「諦めるなよおおおおお！！！！！！！！！！」

次真は魂の抜け殻となりつつあった。四葉も同様である。深雪は精神的におかしくなり、テーブルに上ってくるシロアリを1匹1匹素手で潰している。啓人は無駄と分かってもありったけの殺虫剤を撒き散らす。サンジはシロアリ駆除業者に電話しようとするが、何故か繋がらない。

「あははははは、シロアリ死んじゃえ」（プチップチップチッ）」

「くらええええ！！！！　アー○ジェットおおおお！！！！！！（シ  
ユウウウウウウ）」

「もしもし！？ 駆除業者ですか！！！ な、なんで繋がらないんだよおおおお！！！！」

力オスにも程がある。そして、ついに柱がミシミシと音を立て始めた。崩壊が、近づいている……。

「サヨナラ、オレたちノイエ……。」

覚悟した。。。

「デイバイイン・バスタアアアア！！！！！！！！！！」

ドオゴオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

聞きなれた掛け声とともに、桜色の閃光が片峠家を飲み込んだ。

無だ……。何もない。原型さえ、留めていない……。

「……………」

五人はただ啞然とした。周りにあるのは雑草の生えた土地……。  
家の跡なんて、残っていない。

「にやはは　久しぶり」

管理局のエースofエースこと、高町なのははそんな風景を気にせず気軽に挨拶した。

「……………」

「あれ？ 無口だね。」

「……。」

「久しぶりじゃん。何か言うことない？」

「……。」

「ねえねえ」

「……。」

「ねえってばー!!」

「……。」

「もう(怒)……。」

「……。」

「いい加減にしよう……。」

「……。」

「……頭冷やしたい？」

「……。」





30分後

なのはへの制裁を終え、六人はシロアリ大発生について調べていた。

「……！？ これは……。」

「ん？ なにか見つかったか？」

サンジの検索結果に、五人は釘付けになる。

「これを見る……。『……シロアリの活動が必須なため、繁殖できる木の好みがつるさく、特定の環境でしか採集できないとも言われる……。』。これだ、これに違いない。」

「これって、なんの説明？」

なのはは純粹に聞く。

「『ネプトクワガタ』。」

「ネプトクワガタ？」

「そう。ネプトクワガタだよ……。」

次真が重苦しく答えた。

「なんで次真君は暗くなつたの？」

「なのは姉さん・・・、気づいたんだよ。この騒動の発端人が誰かを・・・。」

「誰なの？」

「光喜よ。」

四葉が割つてはいる。

「光喜やと!？」

「なんで分かつたの!？」

「・・・まさか、光喜はネプトクワガタを飼つてるんじゃない？」

「いや、ついこの間捕まえてきたよ。・・・そいつらが住んでいた朽木ごと、ね。」

沈黙する一同……。そして、

『頭、冷やしてやろう……。』

魔王×6が降臨した・・・。

## 二時間後

光喜はようやく家に着いてみて驚いた。家がない。しかも、何故か皆が自分を見て無表情に頷いた。何かの合図のように・・・。

「あの・・・、何でみんな無表情なの？」

「・・・そりゃあ、家が吹っ飛んだから・・・。」

カチャリ

「なんで、デバイスを構えてるの？」

「自分の心に聞きなさい・・・。」

「何で、憤怒の表情に変わったの？」

「怒ってるから・・・。」



「確かに・・・。」

「よく考えてみれば、私って関係なかったよね・・・？」

「むしろ、制裁を受ける立場としては関係大有りだけど・・・。」

「言えてるな・・・。」

「てか、どうする・・・？」

目の前で黒煙を上げている光喜を見て、黙った。と、

「うお！？ 家がない！！ 建替えでもするの？」

ダメガネ（志村新八）がやってきた。

「新八さん！？ どうしたんです？」

「いやあ、忘れ物したんだよ。」

「何を忘れたの？」

「ちょっとした、実験動物をね。」

ピクッ

「この前すっかり持ってきてちゃってさあ、しかも持って帰るのを忘

れちゃったんだよ。」

ピクッ

「木をとにかく食べまくる、悪魔のような存在で」

ピクッ

「時には家を崩壊に追い込む。」

ビキリッ

「おまけに繁殖能力が非常に高いんだよ。」

ビキビキビキッ

「シロアリ、何処に置いたっけなあ・・・？」

・・・。

ムクッ

起き上がった彼は、ただただ新八を見つめる・・・。

「おっ、光喜くん。傷だらけだけど、どうしたの？」

「・・・せい、だ・・・。」

「えっ？」

「お前のせい、だ・・・。」

「はい？」

「・・・ハーブーン、こいつをキ○ウエアの火口に転送しろ・・・。」

『御意・・・。』

「えっ！？　ちょ、キ○ウエアってハ○イのあの火山のこ」

シュウイツ

新八は転送された・・・。





ネプトクワガタ騒動・後編（後書き）

次真

「新八くんのご冥福を祈って、黙祷。」

一同

「・・・・・・・・。」

新八

「勝手に死なすなああああ！！！！！！！！！！」

次真

「げっ！？　生きてる！！！！　なんで助かってんの！？」

新八

「この小説のギャグ補正舐めんな！！！！　火山に落とされても生き返るんじゃない！！！！」

次真

「どんだけええええええ！！！！！！！！！！」

新八

「というか、僕ってこれが初登場だよな？」

次真

「そうだけど、何で？」

新八

「なんかやけに目立ったよね？」

次真

「もしかして、地味な方がよかった？」

新八

「とんでもない！？　むしろ感謝してるよ！！！！」

次真

「だとさ、作者。」

肥後魚

「まあ、君はキャラを存分に使えるからね。ある一定の時期だけは銀さんよりも多く登場してもらっつよ。」

新八

「僕の時代が……キターーーーー！！！！！！！！」

次真

「……。そういえば、なのは姉さんはなんでいきなり砲撃したの？」

なのは

「ん……、なんかね、人生を諦めたようなオーラが漂ってたから、それを取り除こうと思って。」

次真

「・・・そんなに嫌い？ その気持ち・・・？」

なのは

「人生、諦めたら死んじゃうよ。」

次真

「ごもつとも・・・。」

肥後魚

「次回もお楽しみに」

キラウエア火山は、ハワイのハワイ島にある活火山です。溶岩の温度は約1100、非常に粘着力が低く、流れやすいです。

## 高速戦士との遭遇（前書き）

今回はターボ男先生の小説「高速戦士 ターボX」より、主人公；村上大輔（ターボX）さんがゲスト出演です。どうぞお楽しみに！！

## 高速戦士との遭遇

これは、次真（16歳）が異世界にてちょっとした戦争に介入した時のお話……。

異世界・某所

「ぎゃああああ……!!」

「ひひひひひ……!!」

勇敢なはずの兵士達は逃げ惑う。圧倒的な強さの前に戦意を失ったのだ……。

「何なんだ!!? 何がどうなっている!!?」

「よく分かりませんっ!! 突然1人の魔導師が現れて味方を攻撃し始め、僅か10分足らずでこの有様……。」

「ぬうううう……!! 敵は何者なんだ!!? それさえ分かれば……。」

「だったら教えてやるよ。」

「「えっ!?!」」

「ほら、正体を知りたいんだろ？　だから出てきてやったけど、分かるか？」

二人の後ろには、いつの間にか1人の青年が立っていた。金髪ウィングショート、オッドアイの彼を見て、二人はこの世の者とは思えないような悲惨な表情となる。

「・・・あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・!!!!」

「な・・・なん、で・・・!!!!」

彼の名は、各 異世界間に轟く・・・。

「む・・・む・・・、」

「異名を『無双雷帝』、『新世代の英雄』<sup>ジェネレーションヒーロー</sup>・・・などという・・・、日本魔法総会；西熊の最強エース・・・、」

善人はこの名を尊敬し、悪人は怖れる・・・、

「片峠・・・、次、真・・・。」

「正解！ なら、どうするよ？」



次真はあくまで優しく問いかけてやる。が・・、

「いやだあああああああ！！！！！！！！！！！」

二人は必死で逃げ出す・・・。もちろん、次真が許すはずはない・  
・・。

168

「『水斬・零式』（バシユウウツ）」

ズザアッ

「ぎゃあ ああああ……!!!!」(ドサツ……)「

水の刃で引き裂かれた肉魂が、転がる……。次真はそれを無表情に見下ろしながら、通信をつないだ。

「こちらスパーク0、敵戦力の殲滅に成功した。これで同盟側の勝利は明確になる。」

『こちらメインフィールド2よ。お疲れ様、今日は一段とあつさりと片付いたわね。』

「まあな。指揮官が臆病で助かったよ。」

で、やっぱり殺した？

「逃げようとしたし、あれだけ精神崩壊してたら捕虜としての価値もないからな。」

『そうね。なら、ゆっくり帰ってきてね。』

「了解」

通信を切り、彼は歩き始めた。何処かに川はないかと思ったのだ。飲料水はあるが、体を洗いたかった。

「飛んでいけばすぐだけど、なんか歩きたい気分だなあ。」

（ほう、そりやまた珍しいな相棒。お前はさつさと物事を終わらせたがる気質だろうに。）

「そう言つなよMASAMUNE。たまにはいいだろ、こういうのもさつ。」

（まあ別に構わないがな。一応俺の形態は維持しといたほうがいいんじゃないか？）

「それもそうだな。」

さつきから次真と喋っているのは彼の左手にある日本刀のようなアイテムデバイスだ。名前はMASAMUNE、非常におとなしくて常識をわきまえているが、常識を覆すような力を持つ次真とはとても仲がいい。なので、MASAMUNEは彼のことを「相棒」と呼ぶ。「マスター」や「ご主人」などよりも親しみがあつて、柔らかい雰囲気である。

（ん！？ 何かが来るな……。）

「ああ、近づいてくる……。敵か？」

（いや、民間人？みたいだぞ……。？）

「みたいって、はつきりしないなあ。一体どうなってんだ？」

（うーん……。格好がな……。なんかおかしいんだよ。）

「???」

MASAMUNEが言っていることがよく分からない次真であったが、その疑問はすぐに吹っ飛んだ。

ブ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ

見れば、いかにもスピード出ますよってな感じのバイクに乗った男性が近づいてくる。が、

「ありゃあ、何なんだ？」

無理もない……。なぜならば……、

（何故、イクサのライジングフォームなんて格好を・・・？）

「しかも・・・、なんか赤いし・・・。」

そして、バイクは次真の前に止まる。乗っていた男性はバイクを降り、こちらに歩いてきた。次真は身構えるが、男性は「ちょっとまって、敵じゃないよ。」と言いながらさらに近づいてきた。

「どうも、こんなところで人に会うなんてね。」

「こちらこそ、まさかここに一般人が来るとは思ってもなかったよ・・・まあ、来てもあるのは『死体』だけだよ。」

そう言つて、次真は先ほど殺した敵軍の指揮官二人の遺骸を指差した。

「うつ！？・・・なるほど、ここはもう終わったのか。」

「ああ、さっき俺が一気に片付けた。」

「君、強いんだね。」

「あんたこそ、いかにも強そうって感じだな。名前は？」

「俺の名は、高速戦士！ ターボX！！ 暴魔百族という悪の組織と戦ってるんだ！！」

「なっ！？ お前がターボX！！ まさかこんなところで会うとは……。」

実は、次真はこの世界に来る前の事前調査でこの世界には正義のヒーロー的な存在として『高速戦士・ターボX』という名の戦士がいることを知っていたのだ。彼の戦績や所属組織などを詳しく調べた結果、NMSと共闘関係を気づけるのではないかと思った。そこで、この世界での任務のついでとしてもし会えたならばターボXと話をしたいと思っていたのだ。

「おや？ 俺を知っているのか？」

「まあな。実のところ、俺はこの世界の住人ではない。異世界からきた人間なんだ。」

「えっ！？ 異世界から！！？」

「ああ。で、この世界に来る前にちょっと調べものしたらお前の名前が挙がったんだ。そこで、出来ればお前と直接話をして俺が所属する軍事組織・日本魔法総会・通称NMSと協力関係を築きたいと思っていた。」

「へえ、そうだったのか。共闘の話は置いて、俺のこととかが異世界にまで広がってるなんて……。なら、暴魔百族のことも



「なるほど、それがターボXの正体ってわけだ。」

「改めて名乗るな。俺は村上大輔、普段は『カーチューニング山田』っていう会社で働いてるんだ。」

「ふ〜ん、別に軍事組織にいるって訳じゃあないと。」

「それはちよつと違うな。」

「違う？　ならやっぱりどっかの組織に？」

「う〜ん、詳しくは話せないんだよなあ・・・。」

「そっか。ならいいんだ。」

そついうや否や、次真は大輔から少し離れて魔法陣を展開する。

「さて、俺はもう行かせてもらうよ。任務は一応終わったしな。」

「俺とはもつと話さなくていいの？」

「ああ、もう十分だよ。それに話すといったって、結局はお前をNMSに引き込むのが目的だったしな。だが分かったんだ。お前はここの世界に必要なだ。だからもういいんだ。」

「そっか・・・。なら、気をつけて。」



「ああ、また会おう。」

次真が転送魔法で今にも帰還しようとした時だった・・・。

キラッ

ドガアアッ

ヒュウウウウウ

「危ないっ！！！！！？」

「なっ！！！？」

突然、遠くから小型ミサイルが次真目掛けて飛んできたのだ。が、彼は魔法を展開中のため反撃が出来ない。慌てて転送を中止するが・・・。

「くそっ！！！！　ここまでか・・・！！！！」

「エンジン全開！ターボチェンジ！」

ブオオオオオオン！！！！！！

エンジン音とともに、大輔はターボXに変身した。

「くらえっ、ターボマグナム！！！！！！」

ターボXは懷から銃を取り出してミサイルを銃撃する。

バアンッ

ドガー——ン——！！

ミサイルは木っ端微塵になった。

「ふう、助かった……。ありがとなターボX。」

「いやいや気にしないで。それにしても今は……。？」

「恐らく、<sup>ナカシズ</sup>中静の連中だろうな……。」

「中部？ 一体どんな組織なんだ？」

「正しくは『NMS中部静岡支部』。言ってみれば、俺の西熊と同じ組織の別の支部さ。」

「何だって！？ じゃあなんで攻撃を？」

「西熊と中静は、もう何十年も対立が続いててな……。今このときにも別世界で争いが起きているんだ。なんとも悲しいことだけだな……。」

次真は話しながら、その顔を暗くする。

「そうなんだ……。味方のようなもの同士の戦争、確かにむなし

いよ……。」

ターボXも声のトーンが落ちている。

「なら、俺はこれで。さっきは本当に助か「片峠君!!」・・・なんだ?」

「きつと、その争いは止められる。そしてそれを止めるきつかけとなるのは、君だと思っよ!」

ターボXは何かを確信したような感じでそう叫んだ。

・・・

クスッ

「ああ、やってやるわ!!--!!--!」

キイイイイイン！

次真は元の世界に帰っていった・・・。

「・・・さて、俺も頑張らないとな。なあ、お前らもそう思うだろっ？」

シュタッ      スタッ

見れば、何人かのウーラー兵がターボXを取り囲んでいた。が、彼が慌てることはない。

「ずっと俺をつけてきてたんだな？」

『……………』

ウーラー兵達は答えない。

「まあ、別に返答はいらないさ……。」

『・・・（チャキツ                      タツタツタツタタタ！！！！！）』

ウーラー兵達は武器を構え、ターボXに向かってきた。彼は腰に挿していた刀を抜くと、柄の部分のレバーを引いた。

「ふっ（カチツ）・・・うおおおお！！！！（ブォンッ）」

ズバァアッ

ドサッ

ウーラー兵の1人がバタリと倒れた。見れば、彼の刀『ターボブレード』は刃が赤くなり、水蒸気が出ていた・・・。

『！！！！！！！！？』

ウーラー兵達は驚き、一度距離をとる。

「NMS西熊・片峠次真、か。ヤバイくらい強そうだったな・・・。」

ターボXは独り言を言いつつも、ウーラー兵達から目を離さない。  
一方の彼等も、覚悟を決めたのか、全員が突撃体制をとる。

「いいだろう。俺だって、負けられないんだっ！……！」

『・・・。(コクッ トゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥ……！)(……！)』

「うおおおおお……！！……！！(キイイン……！)(……！」

ドガアアアアアアアアン……！！……！！

~~~~~

【○月 日、ターボXはとある1人の青年と出会った。彼の名は片峠次真・・・、並々ならぬ何かを持つ彼との遭遇がターボXに何もたらしたのか・・・。そして、今日も彼は戦う。ウーラー兵、暴魔・・・、敵は尽きることを知らない。が、彼は戦う！ 仲間とともに！ 大切なものを守るためにっ！！！！】

『いけっ！！ 高速戦士：ターボX ！！！！！！！！！！  
けるなっ！！ 高速戦士：ターボX ！！！！！！！！！！』  
負

~~~~~



完（ターボ男先生の作品は続くよ〜）

## 高速戦士との遭遇（後書き）

肥後魚

「さて、今回はターボXさんに登場してもらいました。」

次真

「命救われたな、俺。なんか感謝しないと・・・。」

肥後魚

「その割にはなんか腑に落ちないようだけど、どうしたの？」

次真

「いやな・・・、俺があ程度のミサイル攻撃に驚いてうるたえることってあるのかなと思って・・・。だってほら、俺ってもう16歳の時には」

肥後魚

「はいネタばらし厳禁！！！！（ズゴォッ）」

次真

「ぎゃああああ！！！！！！（キラ〜ン）」

肥後魚

「ターボ男先生、ありがとうございます。大輔くん、出演お疲れ様でした！！ これからもどうぞよろしくっ！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4585m/>

---

蒼神OFF！！ 駄弁ったり出かけたりします

2010年11月2日14時03分発行